

を窓外に聴きつつ冷き寢床に這入つた。

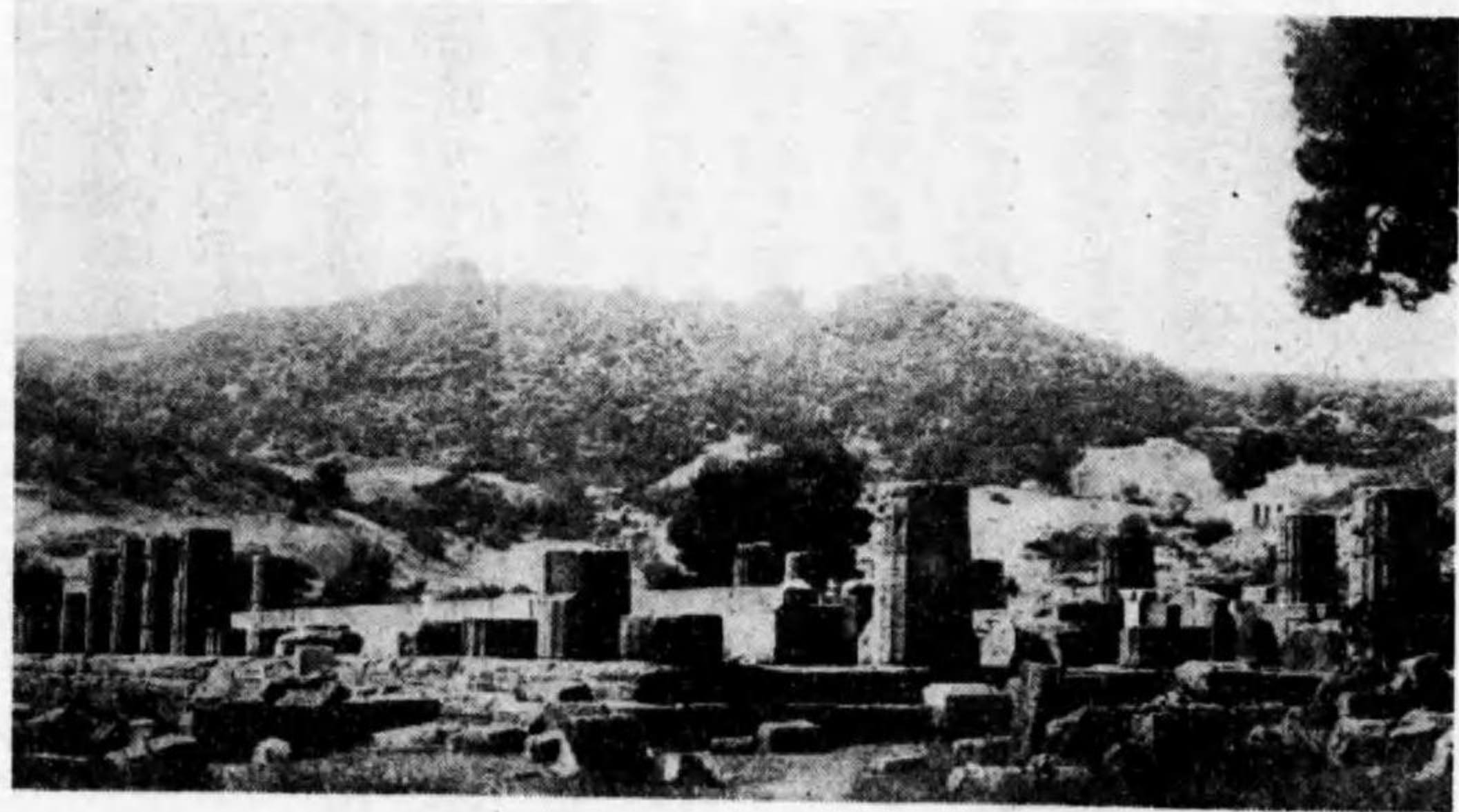
今を去る三千有餘年の昔、ギリシヤ、オリンピヤなるツオイスの靈域に、其の神の祭典に附隨してオリンピヤの競技會なるものが開始された。各四年毎に盛夏の候を卜して舉行され、此の祭典競技の間はギリシヤ各國何れも其の業務を休み、本國は勿論植民地に至るまで、皆争ふて此のオリンピヤに選手を出し、競技の上に名譽の橄欖の冠を争はしむることにした。競技の種類は跳躍、投槍、角力、拳闘、圓盤投さては競馬、二輪車競走など壯快無比の技も演ぜらるることになつた。

ギリシヤはその昔、都市國家の集合體であつて完備せる統一を有する譯でも無つたが、この晴々しきオリンピヤの競技を有せるが爲、不知不識の間にギリシヤ全族一致の觀念を助長し、文化の開展に多大の貢獻を示すに至つたのは争ふべからざる事實である。幾千年の歴史を語るこの舊蹟も盛衰興亡の運命を免がるるに由無く、今は雷々々たる廢墟を殘存せしむるに過ぎぬ。

十二月の二十日朝、夜來の雨は幸に晴れたれども、暗雲は亂れ飛んで、クロノス丘の松吹く風も物すごい。デルフェルド博士に誘はれて旅宿を出たのは八時に先だつ五分ばかりの時であつ

た。博士は旅宿の前なる階段の化石を含んだ凝灰岩たるを指摘し、これこそとのオリンピヤ神殿の一部であつたのを今は移されて此處旅館の營造にも用ひらるるやうになつたのであるなど感慨之を久しうせられた。良がて南に小高く聳ゆるドルヴアの丘を指點し、「彼れこそドイツ帝政時代、國費を以て我等に給せられた邸宅のあるところである。」など物語り、今の有様に引き比べては長大息せられた。

近代式の建築なるオリンピヤ博物館の下を辿りつ、古史に名高いクラデイオスの河縁に出た。河幅は約數間にも足らざる程の細流であるが、雨上りのことと濁流奔放凜まじき勢を以て流れてゐた。博士の言はるるところでは、河筋にも多大の變化があつたもののやうで、我が飛鳥川の夫れの如く、昨日の淵の今日の瀬と變はれるとこ



墟廢のヤピンリオ

るも可なりに多いやうである。その證據にはオリンピヤ靈域の西端、河に臨んでローマ時代の風呂場の址が存在してゐるのである。古圖に依ると可なり河には遠かつてゐたものが、今は一部河中に陥ち込んで大理石の剪嵌細工を載せた煉瓦の土臺がその儘瀨の中に立つてゐるのである。やがて博士共々、東に向つて小やかな獨木橋を渡れば靈域の入口なるパレストラに入る。大體の設計は方形に造られ、四圍を繞りしドリツクの石柱も今は粗方、折れ挫けて荒草の中に其の殘骸を委し、幾千年の史實を秘めて訪客の憑弔を待つもののやうである。此處はその昔、ツオイスの神の祭典の砌、ギリシヤ各地の代表たる力士共の集つて角力の技などを闘はしたところであるとか言はれてゐる。パレストラの規模の偉大なことは闘技場を周つて浴場、讀書室などの設備の址の残れるのを見ても了かる。筋骨逞しい偉丈夫の兩々相對して、今方に龍攘虎搏の活劇を演ぜんとする刹那の光景も今、眼前に髣髴たるやう思はれた。パレストラの北側に小徑を隔て大學院ラルジュギムナジウムと名付けられた一帯の高臺がある。此處はオリンピヤの競技に臨む選手等の競技に先だつて角力や競走などの練習を行ふたところであるとか傳へてゐる。今は雷平坦な空地として何等斷礎の址の訪ぬべき縁よすがも無い。博士の説くところでは此處は全くの野天で技を演じたこととて、建築の設備としては殆ど無かつたとのことである。

廳てパレストラの南に引き還し「テオコレオン」の廢墟に至る。ツオイスの神に奉仕する祭官の常に其の居を下して居たところであるとか。その西南に近くピザンチン精舎の跡がある。云ふまでも無く、東羅馬時代其の寺院を造らへたところ、橢圓の恰好をなせる神壇の石もて造られたのも窺ふことが出来、前庭に敷かれた東羅馬式剪嵌細工モザイクの敷石の址も其の儘に見ることが出来る。俗には此處をギリシヤ時代の名高い彫刻家フィディアスの技術室の遺址であると斷定して居るのであるが博士の説くところではオリンピヤの競技に關與せる役員が時折に會合した會議室の名残であつて、東羅馬の僧院が置かれた際、大なる修築を加へたものであるとの意見である。これから離々たる雜草の間を縫ひつゝ遙に南なる「レオニデーオン」の遺蹟に至る。大體の設計は正方形であるも、今發掘されてゐるのは纔かに北側の半分だけであつて、南側の半分は未だに發掘されず、丈餘の土底に埋まつて居り、其の表面は現に畑地として耕されて居る。今迄述べ來つた諸種の廢墟は勿論これから方に述べやうとする各種の遺蹟も今から四十有餘年前までは可なりに深い土底に埋められてゐた。尙ほ其の上には餘程に大きなオリンピヤの部落が立てられてゐた。何故かくも壯大な廢墟がかくも深き地中に埋れたかと云ふに、紀元六世紀の後半に起つた二回の大地震の爲、壯大な建築も粗方、地中に委し、引續いで靈域の北側に

聳ゆるクロノス丘に地亡があり、破壊せる建物の大半を土中に埋め去り、加ふるに西側を流れるクラデオス河の氾濫の爲、押寄せ來れる土沙を以て愈々深く廢墟の凡てを蔽ひ去るに至つたのである。

之を發掘しやうとする意見は十九世紀の前半にフランス人の間に起つたが、さて事實發掘の大業を成就したのはドイツ人であつて、エルンスト・クルチウス教授はウイヘルム一世帝並に皇太子の贊助を仰ぎ、一八七四年以來一八八一年に涉つて約四百磅の巨資を投じ、殆ど其の大部を發掘することが出來、引續いでウイヘルム二世の時にも建築家のアドラーや考古學者のデルフェルド博士の努力に依つて着々遙遠の太古の史蹟を開くことが出來たのである。

さてデルフェルド氏の言ふところに依るとレオニデーオンは祭典競技の砌、ギリシヤ各地からする貴顯紳士の接待の場所として造られたものであつて、後ではローマの地方官の居處に變へられたとのことである。もとの外郭の四周には百三十八本のイオニヤ式の柱が立てられてゐたので、今に尙ほ、其の礎石の址を下ることが出来る。其の内側即ち内庭の四周にはドーリヤ式の柱廊があり、今に尙ほ其の斷礎の蹟と石柱の破片とを指點することが出來た。内庭の中央部には心字にも似たらんやうな泉池の址があり、更にまたその中央に掘抜井の址もある。

これから東に歩を轉じて「プレウテオリオン」の遺址に至つた。其の内庭の邊一面、斷礎、破柱疊々として處狭きまでに狼藉たる有様である。柱の恰好は破片から推定してドーリヤ式なりしやうに思はるる。其の内庭には傳ふるところによると、もと盟約の守護神と稱せられたツオイス、ホルキウスの神像があり、競技者は競技に出づるに先だつて、必ずこの神像の前に跪いて競技に臨んでは必ず不正のことを働かざるを盟つたとか云ふてゐる。元來オリンピアの競技の起りは宗教的に關連を有するので、其の實施の法も宗教を離れて存在しない。今の競技運動なるものは之とは自ら其の立場を異にするも、競技に臨んでの心懸けは、ギリシヤ人のそれの如く飽までも清淨に誠實であつて欲しいのである。

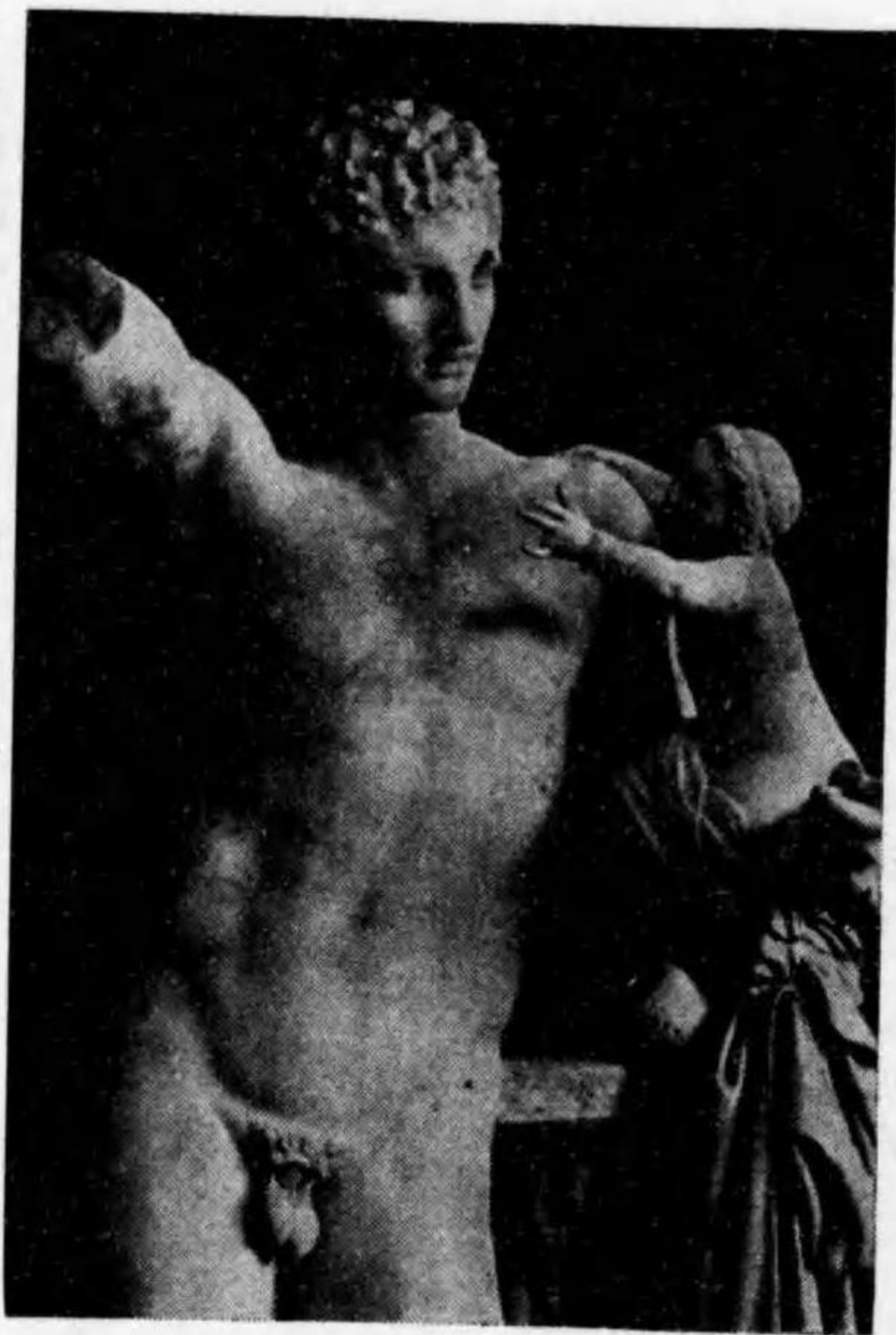
その北側に歩を移すこと數十歩、所謂靈域の中心とも稱すべきツオイスの神の神殿に至る。傳ふるところに依れば此の神殿は紀元前の幾十年の昔に建てられ、エレア州の技師なるリポンの設計で出來たと言はれてゐる。大體の結構は長方形に建てられ、四圍の柱は巨大な化石包含の凝灰岩であつて一個の柱も十、二十の石塊を幾つか繋ぎ合せて造つたもの、何れもドーリヤ式の豪壯な名残を止め、將棋倒しに地に委して巨大な殘骸を横へてゐるのは、往年の豪華の跡も偲ばれて懐古の情を咬ることが頻りであつた。奥殿の址と覺しきところは一段の高みをなし、

青色の石灰岩を敷き詰めたが、フィヂアスの妙腕に成つたと云ふツォイスの神の偉大な石像はトルコ軍侵入の際何處とも無く持ち去られたと云ひ、今は其の根跡をだに尋ねべき縁も無い。此の奥殿の側なる大理石の床の上に少しく黒ずんだ落雷の跡がある。フィヂアスの靈腕に成つたツォイスの像の建てられた時、ツォイス神自ら、其の溢れん許の喜を表すため、雷火を降りて其の跡を長く世に傳ふるやうにしたのであると言はれてゐる。一片の口碑も善く巨匠の努力の跡を傳へて面白く思はれた。

良がて北方に歩を移すこと幾百歩、有名なヘレーオンの殿址に至る。オリンピヤの遺址の中心とも完全に残れるもの一つである。恰もクロノス丘の直下に位し、設計はツォイスの神殿の夫れのやうに長方形を成し、周圍にはいとも巨大な凝灰岩のドーリヤ式石柱を立てた如く、往時の礎石上に昔其の儘、復活を行ふた柱身、さては大斗をさへ建て添へたところが二三箇處ある。奥殿の敷石の下には乾燥瓦を一面に敷き詰め、往昔の綿密な建築術も偲ばれて奥床しい。此ここに存置されたと云ふ、「ヘーラ」の神像もトルコ軍侵入の時奪ひ去られたと云ふことである。今オリンピヤの小博物館に存するブラクシテレスのヘルメスの像——純白の大理石で造られたヘルメス神が左手に酒の神、穉きデオニソス神をかき抱き、葡萄もてる右手をば高く頭上に

捧ぐる。しかも其の右手は惜むべし、破壊したるが、神姿突々巨匠の妙腕を示して餘蘊が無い。——も此の奥殿の側に安置されたと言はれてゐる。

博士を中心とせる余等の一行が此の神殿に辿り着いた比、兼て博士の指令を受けてゐた人夫十數名は夫々鋤鍬を手にして、該神殿の南側礎底の直前を掘り始めた。略ぼ數尺許掘り下げると、驚くべし、十數個の粘土で造つた長さ二寸が程の犬とも馬とも附かぬやうな小獣の像が續々と掘り出された。これぞ奉約物^{ホウヤクモノ}とてもと神に祈願の意味で神殿に納められたものであるとのことである。



像神のスメルヘ

クロノス丘の西側「ヘレーオン」神殿の西北隅に接して「プリタネオン」と稱する建物の斷礎が残つてゐる。ヘスチャの神像の置かれた祭壇を中心に多くの小房の跡が存してゐる。もと

オリンピアの競技を參觀すべく各地から集り來つた諸客の待遇のため立て成されたものと言はれてゐる。

今は頽れ落ちた石柱の破片の中、圓き井側らしきものの殘存するのを見る。「ヘレーオン」の北側からクロノス丘の南麓寶藏の址を辿れば名も知らぬ桔梗らしきが、いとも美事に雜草の間に咲き亂れてゐる。その一枝を記念の爲にもと手折りつ洋服の襟に挿んで寶庫の址の東側を南に下つて競走場スタヂオンへの入口に出た。石で疊んだ細長い墜道がある。意氣揚々として此處から「スタヂオン」に乗込んだ勇士の面影、さては審判官の堂々たる風采も目前に髣髴たるやう思はれた。此を通つて「スタヂオン」の發足場スタヂオンプレースに這入る。

此の「スタヂオン」はクロノス丘の東南麓にあり、大きな長方形を成して擴がつて居る。しかし東端は凡らく弧形をなして居たやうに想像さるる。しかし現に發掘されてゐるのは發足場のところ丈で、他の部分は未だ地下二三丈のところに埋つてゐる。デルフェルド博士の考證では東西の長さは六百二十呎にも及んでゐたことである。發足場のところは南北に長く石柱を横たへ、これには一人一人の選手の身體からだを立たしめ得べき間隔を持し、間々に一本の石柱を立てたるが如く、柱を挿みし穴の、今尙ほ斷礎の上に残れるも面白い。

尙ほ横たへた石柱上には各選手の左足の爪先を載せ懸け得べきやう掘り凹めた跡が多數にあり競走の場合發足の秋毫も亂る無きやう注意せるは實にゆかしともゆかしき限りである。

「プレウテリオン」の神前に赤誠、競技に當ることを誓ひ、意氣天を突かんばかりの勢ひでスタヂオンの隧道を横ぎり此處晴れの場の發足場に着し、秋毫も亂る無き石の凹みに爪先を横たへた勇士の刹那の感情は、實に想望するだに壯快の極みである。

春風秋雨幾千年今や當年、勇士活躍のところは深さ幾丈の地底に埋れて、徒らに雜草の生ひ茂るのに任せてある。往年世界に活躍して歐洲文化の源泉を養へるヘレネス民族は今や空しく蕃民の間に没入し去つて其の精髓を尋ねべき便よすがも無い。遊子管々懽然としてオリンピアの廢墟に立つ。良がて亂れ飛ぶ暗雲は破れ、沛然たる驟雨を齎らし來つた。余はデルフェルド博士に固き握手を捧げて旅宿にかへり、中食後、匆々に行李を收めて停車場に至り、午後二時半の列車に乗じて更に北の方デルファイの舊蹟へと向ふた。

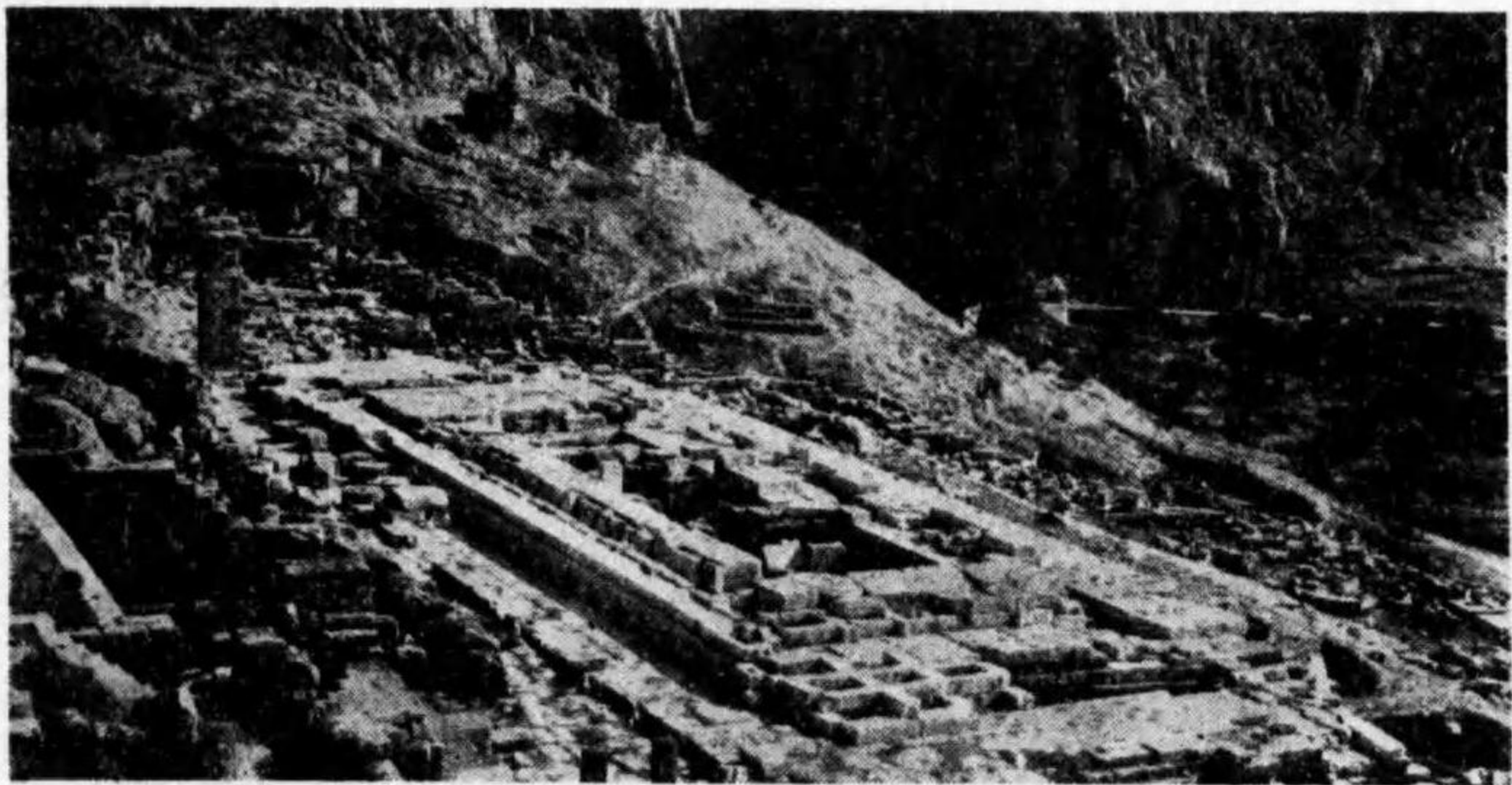
パトラスの港からコリントの水を横ぎつてイテヤの海港に着き、之から自動車でダラ／＼上りの山阪を攀ち、深夜目指すデルファイの舊蹟にと辿り着いた。案内者の不注意から旅宿の準備が行き届いてゐなかつた爲め、多大の困難を極めたが、漸くに一軒の旅舎を捜し出で、此處に宿

りを定めたのである。

翌日（二十二日）起き出でて眺むればデルファイ一帯はパルナッス山の中腹に位し、イテヤの海港から聳え立つこと方に千米突、昨深夜降り積れると覺しく、附近の山々は一面に銀の蔽を展べ、旭光のこれに映發せる様眞に莊嚴極まり無き有様であつた。

アポロ神殿の廢墟に立てば、脚下數十仞の谷底に縷の如き小徑のイテヤを出でて、此處デルファイの靈蹟に通ずるのを見る。橄欖の並木の雪を戴いて徑を挟み、馱馬に鞭てる田舎乙女の其の間を通行する際眞に豆人寸馬の趣がある。

アポロ神殿の斷礎、方形なる中程に清水を導いて之を湛へたるに巨大な盤石——石上に穴を鑿ち水を噴出さするやう装置す——を蔽ひたりしところがある。昔へ神託



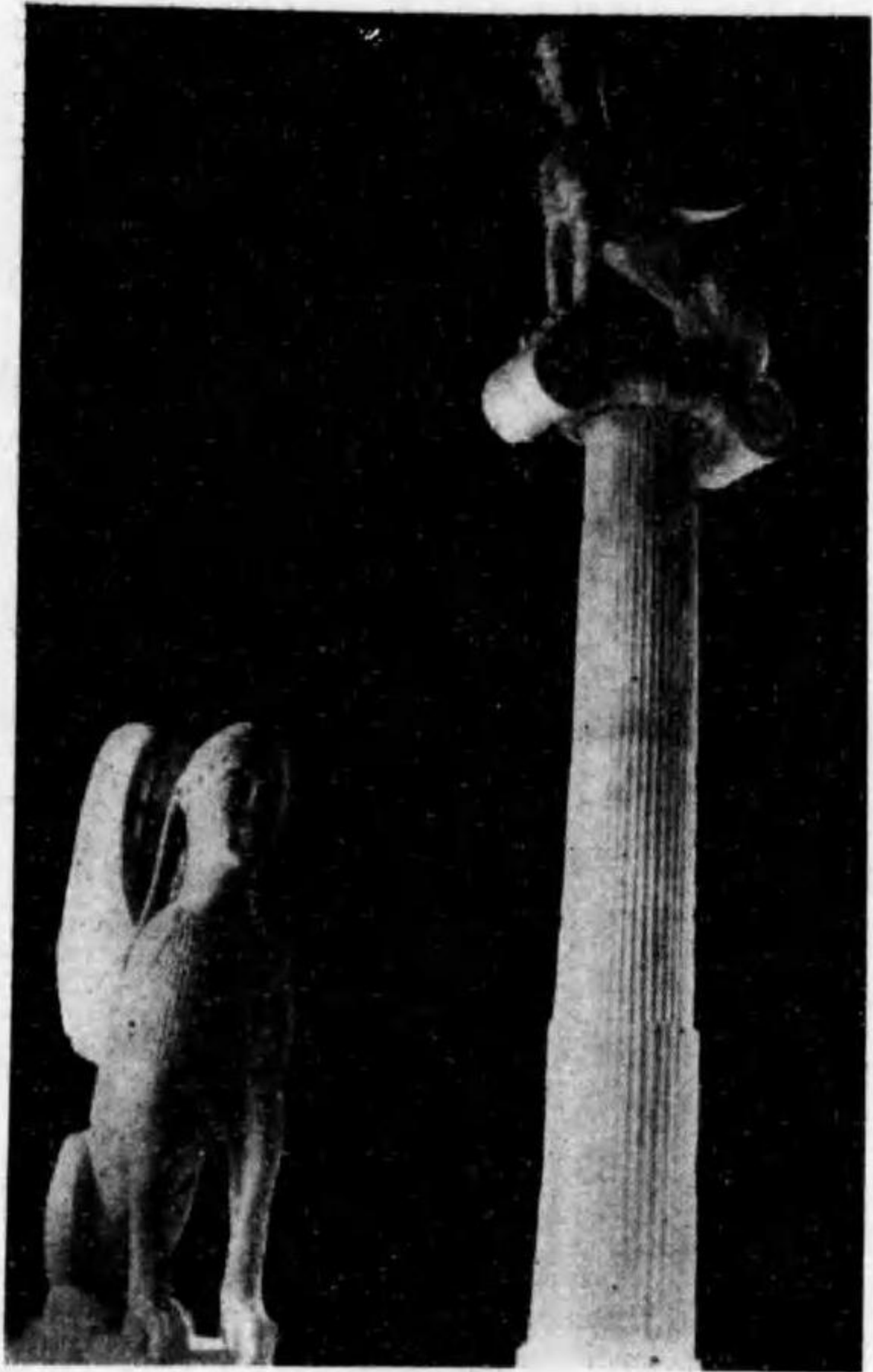
アポロ神殿の廢墟

を受けた其の靈域の蹟であるとか案内のものの説明せるもいと面白く聞きなされた。

其の他劇場や競走場の跡、さてはギリシヤ各都市からアポロの神に捧げた奉獻物を並べ立てた其の跡をも指點することが出來た。尙ほ吾人の先きに君府で見た「蛇の柱」——噴泉三脚柱

の一つ——の備へられた方形の石壇をも物色することが出來た。

デルファイの靈地のギリシヤ本國は勿論、植民地各地方の尊崇をも集めてゐた當時に於ては、ギリシヤは實に世界文化の中樞であつて、歐洲に覇を稱するに至つたのであるが、物換はり星移りて茲に



デルファイの博物館に残るイフスキ

幾千載、國勢は萎靡して奮はず、當年榮華の趣は最早尋ぬるに由無い。神殿樓閣は壞頽し盡して徒らに山河依然として存在する許である。船に乗じてイテヤを出で、アテネに還つたのは月の二十三日であつた。

五三、ベルギー・オランダ概観

昭和の二年正月、余は三高の阪倉君と相伴ふてベルギーからオランダの方面を一巡した。流石に古美術の國として何處の美術館を訪ねても諸大家の雄品大作を網羅し、眞に百花繚爛の境致を味ふことが出来たのである。何處に至つても堂々たる美術館の存するは驚くべき許で、我が國の如き内容の充實如何は別として、兎に角美術館の建設その者を以て焦眉の急と考へねばならぬのである。

ブリュッセル、ヘーグさてはアントワープの繪畫館には斯界の巨擘と稱へられたルーベンスやレンブラントさてはファン・ダイク等の傑作が殆ど無數に藏せられて居り、ブリュッゲにはメムリングの大作家にはファン・アイクの逸品が藏せられてゐる。

オランダのライデンは日蘭交通の史上にも可なり重要な意義を占めてゐるので同地大學の附屬圖書館には日本關係の典籍なども數多く藏せられてゐる。

尙ほベルギーからオランダを通じて古來幾度か外艱の爲に困んだので、其等の慘劇を物語る史料等をも點検することの出来るのは、訪客の感興を唆るのに充分である。しかし何せよ四季

遊覽の外客を迎ふるところであるので、地方の人柄には餘りに感服の出来ぬやうなところもある。

五四、ブリュージュとガン

ブリュージュはベルギーの名邑、レイエ河の河畔に位し、河水に連なる運河を以て街衢の四周を圍繞してゐる。尙ほまたデイヴェーの運河は市の東北から西南に向つて街衢を貫流し、舟楫の便は他に類例を見ぬ許である。更にレイエの河は河水北に流れてゼー・ブリュージュに出で、或はオスタンド運河を経てオスタンドに出で共に北海の水に連らなつてゐる。

さればブリュージュは十三世紀以來、ヴェニスやイープルと相並んで世界商業の中心となり、所謂「フランドル、ハンザ」の錚々たるものとして北獨のハ



レブレンの傑作

ンザに相對し、夙にイギリスの羊毛を輸入してベルギーに於ける織物工業の中心地であつたのである。尙ほイタリヤ方面からも印度の貨物を輸入して市況の殷賑は年を追ふて加はるやうな状態であつた。

されば茲に根據を有する内外豪商の取引處は其の數實に十有七に上り、一時此の地を支配してゐたフランス王フィリップ美貌の王妃ヨアンナの如きも、或る時王に伴ひて此の地に遊びブリュージュ街頭の婦女子の衣裳の艶美なのに驚嘆し「妾は嘗て佛國唯一の王后たるを信じてゐたが、此處ブリュージュの街頭には百の王后あるを認めぬ譯には行かぬ。」と叫んだのは往年の市況の如何に殷盛であつたかを證明して餘あるものである。尙ほ十五世紀に至つてブルグンド侯が此の地に施政の府を營むに及んでは市勢の活躍は意想の外に出で、宗教畫の泰斗たるハンス・メムリングの如きも此地に在つて稀世の妙腕を揮ふてゐたのである。然るに十五世紀の末からは、土砂頻りと河口を埋めて舟運の便は次第に減じ、加ふるに當時の支配者であつたハプスブルグ王朝の諸帝はアントワープに注意を轉じ、最早ブリュージュを顧みぬやうになつた故、該市の形勢は日増しに沉衰に傾いたのである。しかも尙ほ狹隘な街頭には古色蒼然たる幾多宏壯の店肆を存して、往時の盛觀を今日に止むるものがあると言はれてゐる。

余の此の地を見舞ふたのは年立ち還へる昭和二年の一月八日であつたが、午後三時過ぎの列車に乗つてブリュツセルを出で夕景に同地着直に大廣場グラン・プレイスに近いオテル・メムリンクと云ふに宿りを求め、古史に名高い巨匠メムリンクの靈筆を偲んだのである。

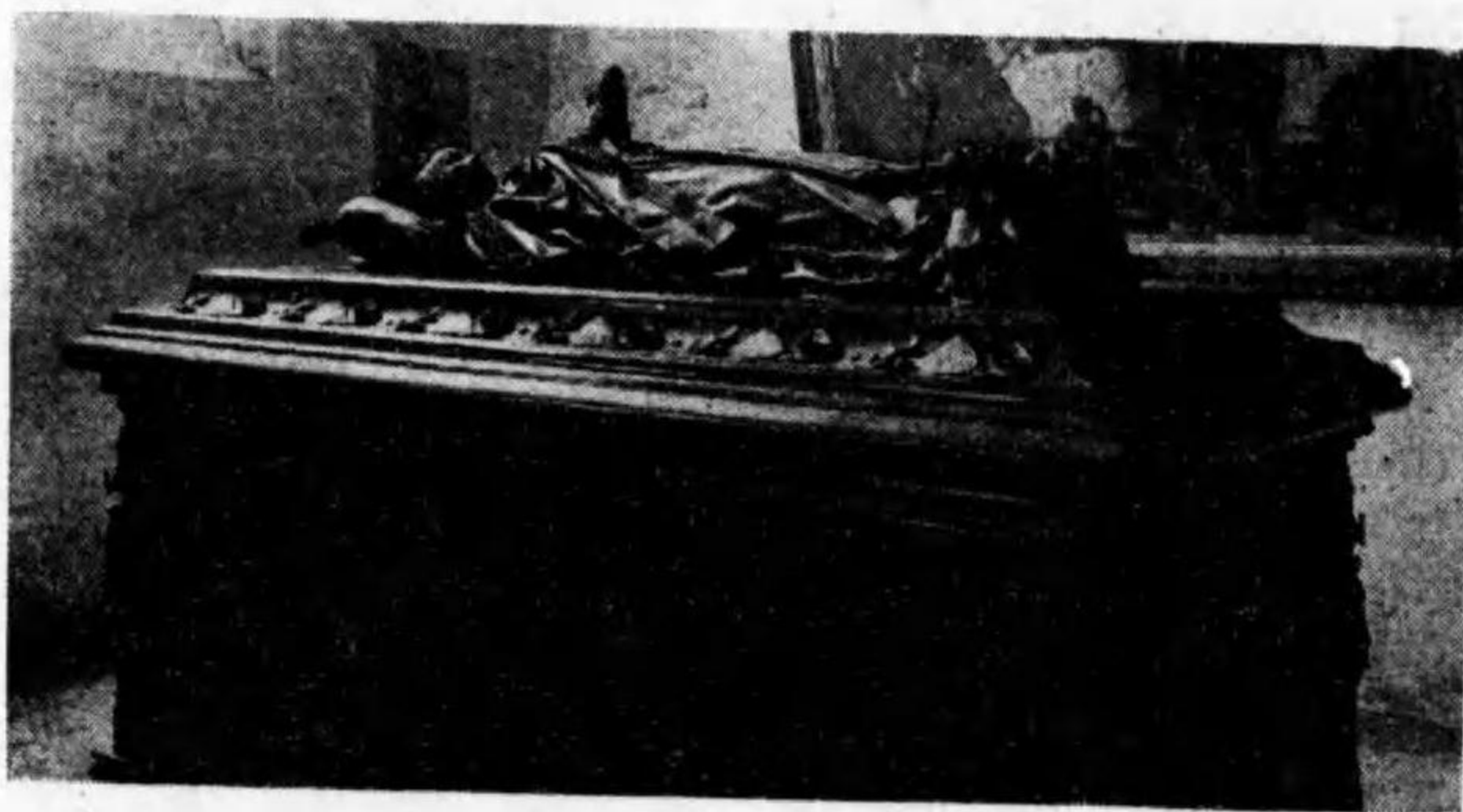
翌九日は早朝から旅館を出で市の名蹟を彼方此方と見廻り歩いた。旅館に近い大廣場グラン・プレイスには憂國の士ブライデル并にコンクの記念の銅像がある。十三世紀の交フランドルの地は、無道なるフランスの太守に依つて治められてゐたが、同地の人民はこれに服せぬ、大廣場の朝市の管理者であるブライデルやコンクの麾下に一三〇二年の七月クルトレイでフランス軍を粉砕して了つた。平民軍の武士軍に勝つた稀有の例と云はれてゐる。此の役に戦死したフランス軍の貴族の鍍金した拍車のみでも約七百箇と云ふものがフランドル人の戦利品に歸し果てたので此の戦を拍車の戦とも云ふのである。ブライデルの銅像は左手に一旒の旗を捧げ、コンクの夫れは手に劍を按じて立ち、當年に於ける勇士の活躍の跡を如實に物語つてゐる。今やこの記念の像を仰ぐにつけても十三世紀當時の市民の擡頭が如何に顯著なものであつたかが、轉るに想望さるのである。余等の大廣場を過ぎつたのは丁度朝方の折柄とて天幕張りの出店セミセが軒を並べて頻りと客を呼んで居り、喧轟の聲は耳を聳する許であつた。

良が大廣場から西南に向つて聖サウヴェーの大伽藍に詣でた。其の創立の年代は明かでは無いが、兎に角十二三世紀に於ける數次の炎上後今の初期ゴティックの煉瓦造に改造されたと傳へてゐる。堂内の莊嚴は眼を愕かす許で、殊に祭壇の「基督の復活」の像は遙か後世の十七世紀に成つたものであるが巨擘ヤンセンの畢世の傑作と稱せられてゐる。兎に角寺全體を通じて十三世紀當時のブリュージュ全盛の面影を歴然と窺ふことが出来る。

これから少しく東南に歩を移せば所謂「ノートル・ダム」即ち「リーヴフラウエン」會堂に詣ぶることが出来る。現存の伽藍は矢張ブリュージュの盛時を語る十三世紀當時の豪華な面影を傳へ、全體の結構は後期ゴティックの壯觀を止めてゐる。

堂内に於て殊に訪客の眼を惹くものは、側堂の祭壇に飾られた巨匠ミケーランジェロの妙腕に成れる「聖母と基督」の像である。傳ふるところに依ればこは十六世初頭に於けるミケーランジェロの傑作であつて、此の比、ブリュージュの豪商ヤン・モンスクロンなるもの百ヂュカートの巨貲を投じて此の逸品を購ひ、自が郷里の此の「ノートル・ダム」に寄進した者であると云はれてゐる。彼の獨逸の畫伯として有名なデューラーも屢々當寺に詣でて此の傑品を賞揚したと傳へてゐる程で、如何に稀世の神品であるかが想像されるのである。尙ほ側廊に添へる禮

拜堂の中には一時ブリュージュに施政の中心を置いたブルグンド侯「カール、豪膽」の墓とカールの女でマキシミリヤンの皇后でマリヤと云はれた人の墳塋が置かれある。兩者ともに其の遺骸を安んずる立派な大理石の石棺の上に鍍金の銅もて造れる父子兩者の横臥像が置かれてある。「カール豪膽」の墓は一五五九年に彼のイスパニヤで有名なフィリップ二世が祖先に對する追慕の情から巨匠ジャック・ジョン・ジェリンクに命じ二萬餘「グルグン」の巨貲を投じて完成せしめたものと傳へてゐる。マリヤの棺柩に添へられた横臥像は十六世紀の名匠と曰はれたピーテル・ド・ベツケルの努力に成り、二十五歳の妙齡を以て不慮の死を遂げた若き皇后の花の如き容顏を後世に傳へてゐる。殊に皇后の母なる人のフランドルの血統を傳へてゐる爲、フランドル人の特色たる尖れる顎を示し居るの



墓のヤリマのドングルブ

「ノートル・ダム」の大伽藍と路を挟んで西に之と相對せるは聖ジャンの病院である。此の病院の創立は十二世紀の時代であり、建造全體が何と無く古色を帯び、且つ會堂と病院とを兼ねしめた中世時代の面影を歴々と今日に見ることの出来るのは面白い。入口の左側に禮拜堂がありゴシック式の極めて莊嚴なものである。右側には施療患者を收容する病院がある。しかし今日では近代式の設備にとり替へられて中古時代の面影を偲ぶべくも無い。

寺院の一部には有名なハンス・メモリンクの一代の傑作を收藏する畫堂が訪客の來り觀るに任してある。

人も知るハンス・メモリンクは一四三五年を以てドイツ、マイッツの傍へなるメモリンクゲンに生れ、夙にブルグンド侯「カール豪膽」に従つてその御抱への畫師となり、其の戰陣の間にも伍して、稀世の靈筆を振ひつつあつたが、「カール豪膽」の殞落に逢ひて憂愁の情止みがたく、遂に侯の遺骸の安んぜらるるこのブリュージュに足を止め、幾多稀世の逸品を残して一四九四年に世を終つた。一にはメモリンクの老後落魄して此の聖ジャン病院の門前に斃れぬたるを、寺僧に救はれて院内に足を止め、有名な「聖ウルヅラ殉教」の畫を此處に残すに至つたと云はれてゐる。

メモリンク畫堂の正面には殆ど壁の全面を蔽ふて「基督の埋葬」を描いてある。敬虔の念は丹青の間に溢れ、轉る看者の襟を正さしむるものがある。

畫堂の中程に近く有名な「聖ウルヅラ」の神龕がある。龕全體の結構はゴシック式の伽藍に形どり、櫺の堅材で造られ、内部には「聖ウルヅラ」の遺骨の一部を安んずると傳へられてある。龕壁の四周にはハンス・メモリンクの靈筆に成る「聖ウルヅラ」の殉教の物語が穹窿頂を有する畫布面の數々に序を追ふて、最も鮮かに描き出されてある。此の名畫こそはメモリンクの死歿に先だち、略五箇年の心血を傾倒して完成するに至つたもの、全幅を擧げて嚴肅と敬虔の氣に充ち満ちてゐる。(口繪参照)

傳説に依れば「聖ウルヅラ」はブリタニーの王ドナートの愛娘であつて、幼時から熱烈な信仰に富んでゐた。良がては年長じて異端の國王の繼嗣と婚を行ふべきことになつたが、その婚嫁に先ちて羅馬巡禮の素願を果したき旨を主張し、さてこそ數多の侍女を随ひ、ラインの流を溯つてケルンを過ぎ、バーゼルに出で、遂に永久の都羅馬に至つて、數々の靈蹟を訪ひ、歸航の途次はまたもやケルンに至つたが、遂に兇暴なノルマン軍の掌中に落ちて、殉教の譽れを擔ふに至つたと傳へてゐる。

畫面中、特に吾人の眼を惹くに足るものあるは、ウルヅラの一行がケルンの岸邊に船を寄するところと、そが遂に殉教の素願を遂ぐるに至れる場面とである。前者にありては平穩なラインの航行が圖らず逆風の妨ぐるところとなつて、暫しケルンに船を寄せんとするところを描き伽藍の樓上に天使の見ゆる様などを描いたのも面白い。後者にあつてはウルヅラが天國に迎へらるるの喜に従容自若として雪の肌を異端の兵の弓矢に委するを描き出し、宗教熱の盛であつた中世時代を轉るに髣髴たらしめてゐる。

良がて「聖ジャンの病院」を出で「ノートル・ダム」の伽藍の側を辿つて、デヴェルの川岸に近けば、此處に「グルンツォーゼ宮」と名付くる古色を帯んだ建物が残つてゐる。勿論現存のものは十九世紀に改修されて市博物館となされたものであるが、其の大部は今に尙ほブリュージュの貴族たるグルンツォーゼの豪華を誇れる邸宅の面影を傳へ、室房の装置、襲藏の器什にも注目を値するものが多い。一六五六年當時大陸に亡命の客であつた、後の英王チャールズ二世を請じてブリュージュなる「聖ジョルヂの弩手組合」が盛大なる宴を張れるの畫など當時の風俗も偲ばれて中々に面白く思はれた。

これから更にデヴェルの川筋を傳へ、東北に向へば、市廳オランダライエの重厚な彫刻を附したゴティック

式の建物がある。昔フランドル伯の治下にあつた際には、伯の統治の始めに、市廳の階上なる窓口に現はれて市民に善政を誓つたと言はれてゐる。階上の大廣間なる四壁には市民の偉績を物語るとも巨大な歴史畫が描かれてある。殊に拍車の戰の華々しい活劇など當時の面影をいとも如實に描いてある。

市廳に接して西隣に古色蒼然たる聖血寺シヤベル・エ・サン・サンクと稱する伽藍があり、寺の大部は十二世紀當時の面影を傳へてゐる。傳へるところに依ると、一一五〇年にアルサス生れのデイートリヒなる人が、遠く聖地のイエルサレムの地から清く尊き基督の血の二三滴を齎らして此の寺に寄進したと言はれて居り、今に尙ほ其の折の聖血を盛れる硝子の納器を寶藏に襲藏し、毎年開張の定日には遍ねく公衆の禮拜に任せてあると



グレンツォーゼの邸宅

聞いてゐたが、余等の當寺を訪れた際には平日のこととて遂に其の機を得ずして止んだ。尙ほ此の祭日には「聖母」の像を行列の先頭に立てて街頭を練るの古風ありとかにて、堂内の一隅には其の折の聖母の像を齋き祀れるのを見た。尙ほ此の聖母の前には大小様々の魚袋を數多く捧げこれに一一奉納者の姓名なども記してある。案内のものに紇せば病厚き子の近親より病の癒えるを禱るが爲めに捧げたものであるとか。さるにても愛兒を思ふ親心は、東西其の揆を一にするものあるを、今更ら乍ら深くも感ぜしめられたのである。

これから足に任せて此處彼處の街頭に近古時代の遺蹟を數々訪ね廻り、八日の晩景の五時過ぐる頃、汽車でブリュージュを出で、其の日の六時過ぐる頃、東方なるガンに到着、驛に程近き「オテル・ア・ラ・ポスト」と云ふに宿りを定めた。

翌九日は早朝から市内の見學に向ふた。ガンも亦運河が交錯して街衢を不規則に導いてゐるが、宛然たる水の都である。先づ市の西北隅に近き「ラボット」と稱する舊堡寨の跡を観る。「ラボット」は「ダム」及び「スロイス」を過りて北海の水とガン市を繋ぐリエーヴ運河の邊に立つ一箇の小なる稜堡の形式を爲し、ゴテイツク形の二箇の圓塔の間に和蘭式の美事なる正面がある。運河の汚水は塔の下なる水閘の隙を過ぎつて流れてゐる。「ラボット」なる語も

畢竟は水門の義なりとか言はれてゐる。傳ふるところに依れば一四八九年神聖羅馬帝マキシミアンの此の市を圍んだ折、市民が奮闘して之を退け、其の記念の意味で此かる塔樓を築いたと言はれてゐる。後年マキシミアンの勢力が此の市に及んだ際でも、尙ほ此の不名譽な記念物を取り拂はすることが出来なかつたとのことで、近古時代に於けるフランドル市民の意氣の極めて旺んであつたことが想望せらるる。

良がて運河の畔を傳ひて東南へと歩を轉ずれば、これも同じく運河の畔に巍然として聳え立つフランドル伯の城寨を仰ぎ見ることが出来る。中古式城寨の面影は今に尙ほ歴然と認むることが出来、西北の兩面にはリエーヴの水を周らして濠水常に深く、東南兩面は直接、街路と相接はつてゐるが、石壘高くして容易に敵人の近づくことを許さぬのである。

此の城の創立されたのは第九世紀の比と言はれてゐるが、十二世紀の後半期にアルサス伯のフリリツプが、十字軍の戦役から還つて茲に莊大な城地を營み、ブリュージュの城寨と相並んで、二箇の堅牢なフランドル伯の金城湯池たるに至つたと傳へてゐる。大體の結構は楕圓の形を成し、客間大廣間さては守衛の兵の溜の間、城主の居間など、今は大方荒るるが儘に任せてあり、陰酸の氣が何とはなしに漂ふて來るが、四壁は嚴めしく閉ざして在りし昔の壯觀を偲ばしむるも

のがある。城壁を攀ぢて銃眼から外に眼を馳すればガンの全市は一望の下に聚まり、聖バヴォンの高大な塔も目睫の間にある。フランドル伯の盛時には諸種の式典を此の城に催し、フランドル各地の侯伯武士を招いて宴席を張り、さては「騎士」の榮譽を與ふるの嚴肅な儀禮も此處に行はれた。壘上に立つて遙に八百有餘年の昔を追想すれば甲裝燦々たる武夫の今尙ほ目前に徘徊するかと思はるる。

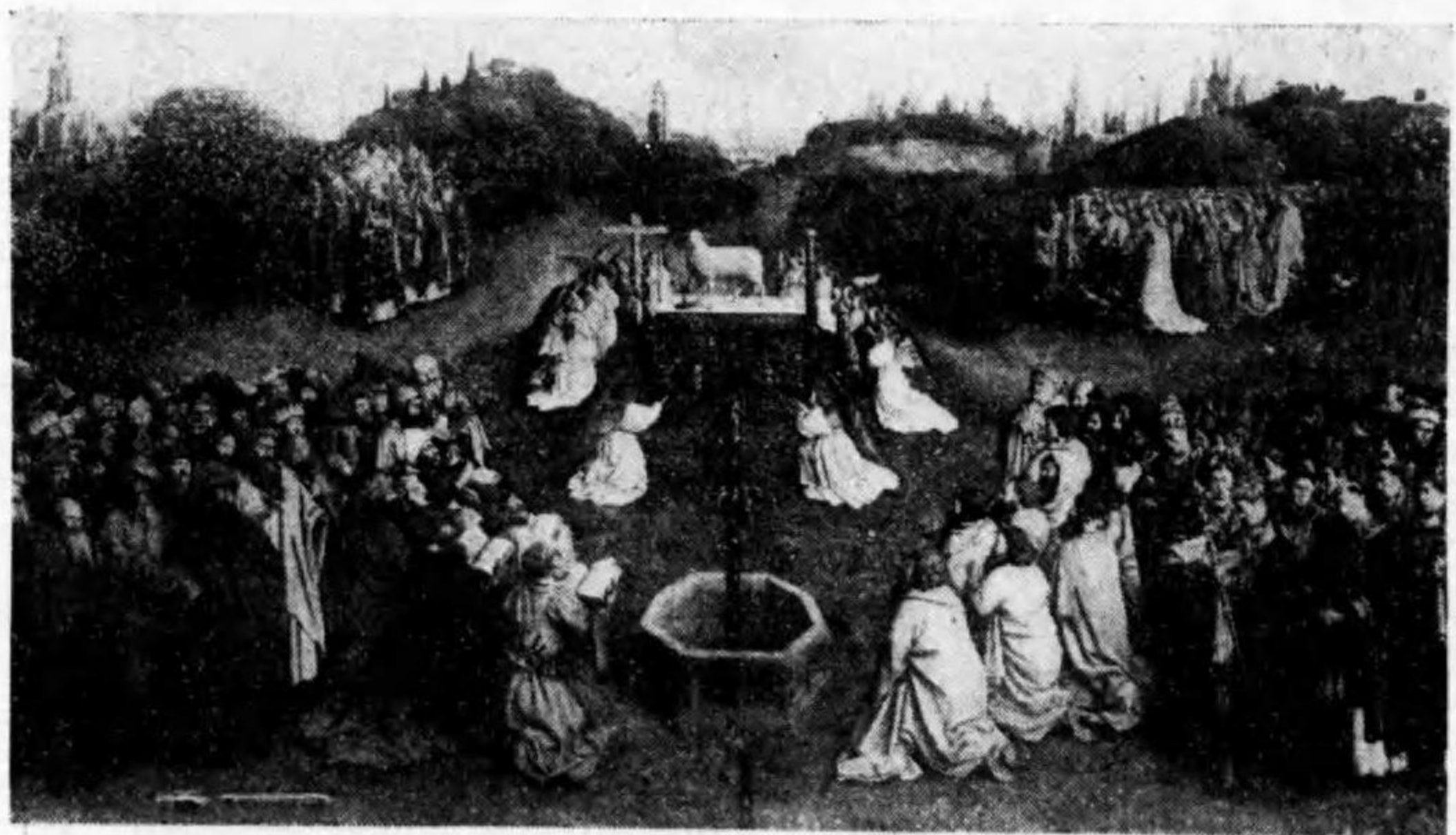
良がて城地を去つて南に程近い聖バヴォンの境域に出づる。一六〇二年の大火に尖端を打ち折られたと傳ふる高さ八十米突餘の西塔は宏大な壯觀を誇りつつある。尙ほ伽藍の四周は堅牢な花崗岩で造られ、輪奐の美こそ無けれ、雄偉の觀がある。其の創立は紀元第十世紀にまで遡ることが出來ると曰はれてゐる。

今日は折節日曜のこととて禱の爲に聚まれる男女が堂内に充ち溢れ、讚美の歌は朗々として堂外にまで漏れ聞えた。良がて禱の果てた後、堂内に入りつて側廊に添ふた一小堂に安んずる巨匠ファン・アイク兄弟の勞作に成る稀世の祭壇畫神羊禮讚の名畫を見た。犠牲壇の小羊を圍んで白衣の天使が跪き、その又四周より君侯、聖徒、僧侶俗人など何れも合掌して近き至れる有様を描く。小羊の流す血汐に人類の罪の救はるるのを世界の人類の集まつて讚仰する壯嚴

無比の光景は此の一幅の畫面に溢れてゐる。尙ほ二箇の翼板に描かれたアダムとエヴァの兩像も流石に名匠の努力の跡を傳へて嘆賞に値するものがある。此の名作は十八世紀の交佛軍に依つて一時パリーに移されたのであるが、一八一五年のヴィーン公會の決議に基き、又もや「聖バヴォン」の會堂に戻ることが出來たと傳へてゐる。このことに依つても該名畫の如何に稀世の逸品であるかが充分に知り得らるるのである。

近古時代の面影を傳ふる織物商館の跡を探ね、尙ほ繪畫館に咲くフランドル畫壇の名作を心ゆく許、嘆賞し、其の日の午後五時列車に搭じてガンを出で、東北アントワープにと向ふた。

五五、ライデンの今昔



神羊禮讚の畫

昭和二年の一月十三日夜來の雨は名残無く收まつて一天は眞にすがくしき許に晴れ涉つたが、寒さは骨肉にも徹する許である。朝の程同行の阪倉君と連れ立つて、ライデンの西北郊なる客舎を出て市内の見學にと向ふた。

我が徳川時代に來朝せる紅毛人の中にもライデン方面のものが可なりに多かつたなど聞いてゐるので、路行く蘭人の面を見るにつけてもその昔の紅毛人の後裔かと思はれ何と無く懐かしき氣持がせられたのである。スタツテン街といふを南して右に折るればモルシユ・シングルと云ふもとの外濠の水に臨んだモルシユ・ポールトと稱する城門の址がある。門樓を冠するに穹窿屋を以てし、外容が頗る奇である。大凡ライデンの形勢を按ずると稜堡式の壘濠を周らし、其の間に城門を開いて城内と城外とを通ざるものやうであり、モルシユ・ポールトの如きも其の一つである。今の街衢の中心は概ね此の壘濠の内部にあつて壘濠の外に展びたるところは極めて尠ない。更に壘濠の中には運河をば縦横に通じ、水量も可なり豊富に、小船舶の往來には充分である。とは云へ、河水面は道路面と大差無く、豪雨一度至らんか、忽ちにして氾濫を免かれぬやうな状態にある。隨て隨處風車を利用して排水に努めつつあるのは當然である。

モルシユ・ポールトから南デ・ラインの運河を超ゆればヴェツテ小路の左側に十七世紀を飾る和

蘭派の巨匠レンブラントの呱呱の聲を挙げた小やかなる舊宅がある。折節改修の際であつて其の内部を見ることの出来なかつたのは遺憾である。

良がて東北に向つてオウデ・ヴェストの運河の北に出づれば、此處にライデン市史博物館がある。もとは十七世紀に立てられた織物商館を其の儘に博物館に充てたとのことである。近古時代に——凡らくはイスパニヤの服屬時代——新教徒迫害の爲に用ひられたと思はるる見るも恐ろしい拷問の道具が數々ある。胴體を桶に入れて、首のみ圓き穴から外部に出させ、之を轉がし廻はしたと云ふ、我が切支丹迫害時代の「ころび」の刑を偲ばするやうなものもある。

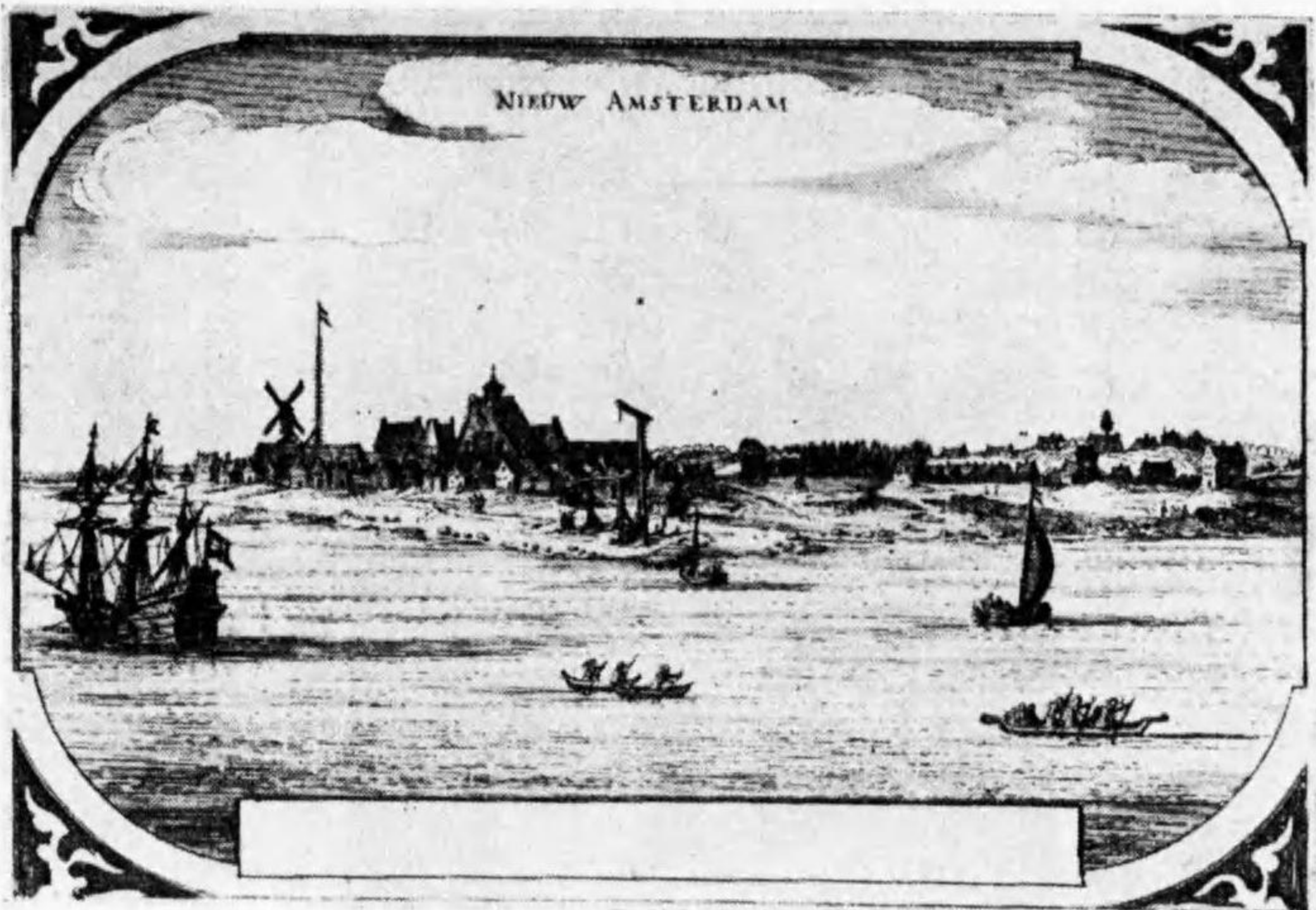
更に此の館の陳列で一きは吾人の注意を惹いたのは「ファン・ブレイ」なる畫家の描いたライデン市長のファン・デル・ウエルフが壯烈無比の奮闘を描いた大幅の油畫である。(口繪参照) 時は一五七四年和蘭獨立軍の形勢は日増しに熾まり、勝ち誇つたイスパニヤの大軍は潮のやうに、孤立無援のライデンの城市を包圍し、揉みに揉んでぞ厳しく攻め立てたのである。全市民は擧つて防戦に努めたものの、糧食は次第に盡き果て、老幼婦女は飢に斃れて、其の數は數ふるに遑が無い位であつた。困憊の極に達せる市民は、守城の統御に當れる市長ファン・デル・ウエルフに迫つて具さに慘狀を訴へ、開城に非ざれば糧食を供せられたいと請ふた。實にや市

長の眼に映する限り悉く菜色あるのみである。此處に彼處に餓莩は累々たる許りであつた。ウエルフは突如、自己の帶劍を市民に與へ「己が生命を屠つて、肉を餓莩に與ふべし」と叫んだ。市民の總ては此かる悲痛な決意に多大の感動を受け、疲れたるものは猛然として立ち、餓ゑたるものも奮然として敵讎を邀へた。

良がて獨立軍の統帥に當れる「ウイルレム・沈黙」^{シユウワイゲル}は堤を決してイスパニヤ軍を困め、艦隊を艤して糧食を供へ、イスパニヤ軍の背後にと迫つた故、ライデンの全市は漸くに救はれ、獨立の快舉は遂に其の目睹に達することになつたのである。

畫面に現はすところは、佩劍を抜いて市民に與へ、己が生命を奪はんことを要望してゐるその市長の面容、悲痛壯烈の極致を描いて毫も餘蘊が無いのである。

良がて館を出て南し、所謂ライデンの本丸とも云ふべき「城地」^{ブルグ}に至つた。先づ石門を入いつて小徑を縫ひ小高き丘に上れば、殆ど圓形を成せる壘壁の跡が残つてゐる。凡らくは中古時代からのものであらうと謂はれてゐる。壁壘の内に一箇の古井がある。最とど深いものであつて殆どその奥底を窺ふべくも無いのである。戦時用水に用ひられたことは其の城地の中に存在することに依つても推想するに難くは無いのである。



ニユー・アムステルダム古の圖

次に西南に下つて聖ピーテル會堂^{ケルケ}に至つた。

寺はライデンに於ける最古の伽藍であつて一三二五年の創立、莊大なるゴテイツクの建築、内陣や壁畫も一見に値するものがある。折悪しく改修の際であつて細部の見學を得なかつたのは遺憾である。側廊の中に程近きライデン大學の英俊と言はれた杏林の碩學ポエルハウフエの墳塋がある。名聲夙に宇内に著はれ、明の萬曆帝から賞盃を下賜されたのであると言はれてゐる。寺の南壁に「巡禮僧」^{ピルグリム}（非國教の英人）の教父と呼ばれ、ニユー・アムステルダム即ち今日のニユー・ヨークの建設に間接著大の功勳を残した彼れジョン・ロビンソンの記念碑がある。碑上に刻せる船舶は所謂「メーフラワー」號であつて、一六二〇年「巡禮僧」等の

アメリカに涉つてニュー・アムステルダムの創立に従事するに至つた其の折の、乗用の船であつたと言はれてゐる。

此の記念碑と相對して路次の南側にジョン・ロビンソンの住宅が残つてゐる。所謂巡禮僧の教父たる彼れロビンソンは此處に久らく寓を營んでゐたと言はれて居り、壁上に貼せる銅碑の



宅邸のソソンビロ

上には「ジョン・ロビンソン此處に居し此處に教へ、此處に死せり、一六一一—二五」と記してある。

人も知るロビンソンは英國の人、夙に國教に背いて本國を脱走し、暫し蘭國のアムステルダムに潜惹してゐたが、後にライデンに居を移して所謂アメリカ渡船の巡禮僧の訓養に努め、遂にニューアムステルダム即ち今日のニュー・ヨークの創立に間接、不朽の勳績を垂るるに至つたのである。

聖ピーテル會堂から少しく西南に隔つて有名なライデン大學と、その附屬圖書館とがある。

此の大學は十六世紀の創立であつて、爾來幾多の碩學を輩出させ、名聲全歐に噴々たるものがある。

附屬大學圖書館には一八二三年和蘭艦隊に伴ふて日本に來り爾來滞在七年、科學上の探究に従事した彼れ、獨人フィツプ・フランツ・フォン・シーボルトの將來の書が數々あると聞いたので、特に館を尋ねて其の閱覽を請ひ、千蔭註萬葉、蘭和字書さては妹脊山戯曲本など珍らしきもの數多く收藏せらるるを知り得たのである。

夕景の六時三十五分に汽車でライデンを出で立ち、七時を過ぐる比、無事アムステルダムに着し、直ちに驛前のヴィクトリヤ・ホテルと云ふに投泊した。

五六、 シュウワイツ雜觀

永世の局外中立國として、將又風光明媚の歐洲の樂園として皆人の善く知るところのものは實にシュウワイツであらう。雪を冠せるアルプの連峯、明鏡磨き出せるゲンフの湖水、牧羊の鈴の音も緩やかに緑の緩坂に草食ふあたり眞に一幅の活畫圖である。

山嶺重疊の間に自ら剛健摯實の氣風が養はれ、十三世紀に於ける三州の團結は良がて遂にハ

プスブルグ家の羈絆を脱して、自守獨立の國を建設するやうになつた。當年活躍の遺跡は至るところに之を訪ぬることが出来る。

風光明暉なる自由の域には一面、潑刺たる思想界の活躍を促し、ルーソーの如く奔放なものツウイングリの如き熱烈なるものをも産するに至つた。地人相互の密切な關係は此處シュワイツの天地に於て最も其の完全なる例證を見出すに苦まぬのである。

五七、アルプス嵐に寒きローザンヌ

昭和二年の拾月五日朝シュワイツの西北バーゼルを汽車で出で立ち其の日の午後ローザンヌに着、停車場に程近き「ホテル・コンチネンタル」と云ふに旅装を解いた。暫し旅の疲れを休めた後、見學に出で立ち、翌六日に亘つて市内に名高き名勝や史蹟は一わたり巡覽することが出来た。

何にせよローザンヌはシュワイツの西南、風光描くが如きレマン湖の北岸に立ち、高臺の斜坡に營まれた古き市まちであるから、眺矚の雄大なことはシュワイツでも屈指ゆびをりの處である。特に脚下レマン湖を隔ててアルプの靈峯を前面に望むの光景は確に西歐の絶勝と云ふことが出来やう。

旅館の側なる「リュイ・ド・ブチー・シエヌ」と云ふ急坂を攀づれば、坂路を登り盡したところ「聖フランソア會堂」と云ふ極めて古色ある伽藍がある。十三世紀當時からの會堂と云はるるだけあつて、極めて古色蒼然たる面影がある。

これから一路東に向つて「モン・ルポールの公園」と云ふに至る。此處は矢張斜坡に横たふ一帶の自然林を、其の儘これに公園の設備を施したもので、鬱たる森林の下に、噴泉があり、亭榭があり、折しも黄ばんだプラタナスの葉の風に亂るるも一層きはの趣があつた。園の一隅にベノアの陳列館と云ふのがある。館の前身は「パードンネの別墅」と稱するものである。これには小やかな舞臺なども建て添へられてゐたと傳へてゐる。さればフランスのボルテールなども屢々此處に悠々自適の生活を樂んだものの如く、今に陳列館の中には、その當時彼れが俳優と共々演劇に携はれるところなどを面白く畫いたものも藏せられてある。

良がて「モン・ルポールの公園」から西北に向つて歩を轉らし、ベジエールの空橋を渡つてローザンヌの大伽藍に至つた。此の伽藍は十三世紀の創立と傳へてゐるが、現存のものは十九世紀から現世紀に涉つて舊様式に依り復活を施したものである。全體の結構は初期ゴテイツクの様式を有し、西塔及び中央塔は轟として雲際を摩し、シュワイツ最大の伽藍と稱せられ

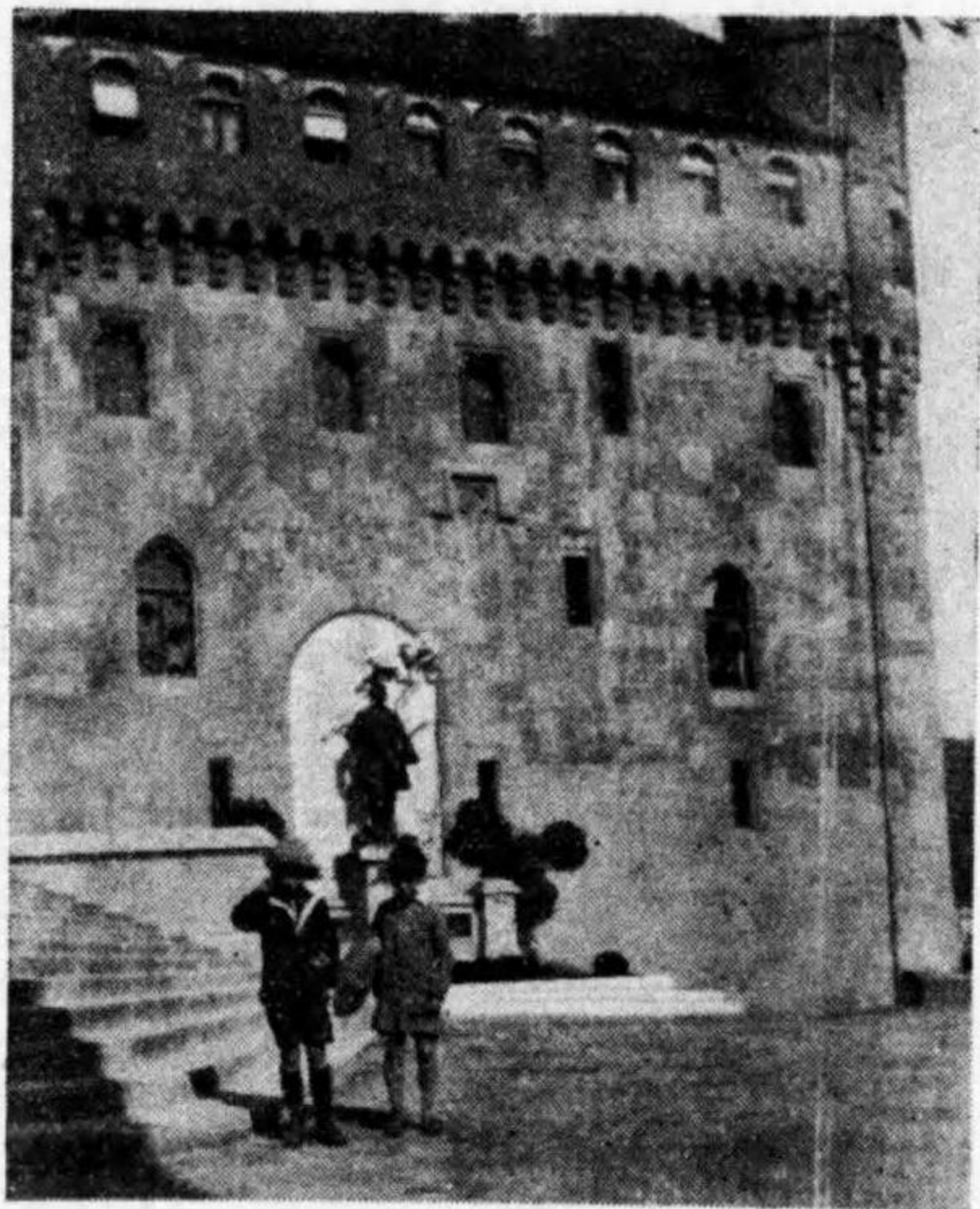
てゐる。南側の所謂「使徒の門」^{アポストロートル}は十二の使徒の像に飾られ、西側の門戸は「主要門」^{ハウプトポツタル}と云ひ莊嚴の美を極めたゴテイツク式の大作である。この堂内こそは嘗て一五三六年に新教の三雄、カルヴィン、フアレル、ヴェレーの三者が新教の爲に熱辯を振り、シュワイツの大部を擧げて羅馬教會の羈絆を脱するに至らしめた舊蹟である。堂前の崖端から眺を南方に馳すれば、高低晉ならざるローザンヌの全市は一眸の裡に收まりレマン湖を隔てて白雪皚々たるアルプスの連峯も眼底に映じ來つた。折柄吹き至るアルプス風は寒きこと骨身にも徹する許りで長く止まることが出來ぬ。歩を北に進めて舊城のところに出た。

大伽藍と同じく崖端に添ふて立て成された舊城は十四五世紀の創立であつて、もと僧正の居館であつたが



景雪のズブルアと藍伽大ヌンザーロ

十六世紀から十八世紀にかけてはベルンの侯の代官の治處となり、今は州^{カントン}の行政廳の存するところである。南側の壁に沿ふて憂國の士ダヴェル少佐の記念の像が立てられてある。時は一七二三年無狀を極めたベルンの代官の政道に對して武力的の抵抗を煽動し、武運拙なくも捕へら



像念記の佐少ルエヴタ

れて刑に死んだ彼れダヴェル少佐は今に尙ほローザンヌの人々の惜むところである。記念の像を背景に其處に立つ二三の小兒を撮影したのは、今茲に挿入せる片影で遊子の永き思出の一つとなつてゐる。

良がて舊城の崖端を下つて少しく南に下れば、「リボンヌの廣場」と云ふのがあり、市場に集まる老若で可なりの雑沓を極めてゐた。

その東側の丘陵に高く聳ゆるは所謂ルミーヌ宮殿の大學と稱し、極めて宏壯な大建築、其の一部に存する美術館はシュワイツの繪畫の著名なものを蒐めてゐる。又この大學の一室こそは過ぐる一九二三年の七月二十四日に希土兩國全權の目出度も其の媾和の條約を調印したところで

ある。

驛前の廣場に引き還し、「フイニキュレル」即ち「ケーブル・カー」で急坂を南に滑走すること約十五分程、ローザンヌの南郊所謂レマン湖畔のウーシと云ふところに出た。此處は風光明媚の海水浴場で、旅館の宏大なものが軒を並べて聳えてゐる。中にも「ホテル・ヴォー・リヴアージュ」といふは堂々たる石造建築で一九一二年十月十八日以土戰役の媾和の調印を了したところと云はれて居る。湖畔に立つて南を望めばアルプの連峯は千古の白雪を戴いて蒼空にそそり立ち湖面には名も知らぬ白鳥數多群れゐて、平和の美觀を現じてゐた。もとの驛前に辿り着き、匆々に旅装を整へ、五時十五分の列車に搭じて西南ジネーヴへと向つた。

五八、秋風颯たりゼンパハの戰場

昭和二年十月十二日余はシュワイツの名勝ルツェルンに至つて暫し此に足を止むることとし、フイールワルドステットの湖畔に心ゆく許り山國の秋色を掬し、さては市内に現存する立戰役に關する文書や其の他の史料を一わたり巡覽するところあつたが、同地市廳ライトハウスの郭ありさまに存する歴史博物館は流石に獨立戰役特にゼンパハ戰（一三八六）の遺品を以て充積するの狀態で

ある。それも其の筈ゼンパハの戰に塙軍の優勢に抗して乾坤一擲の壯舉を演じたのは實に此のルツェルンの勇兵共であつたからである。此の勇兵共の用ひた斧、鎗、鉤に兼用されたといふ「ハレバルト」さては古々しい青白の絹地から成るルツェルン軍の旗幟しるしなど其の昔の努力の跡を物語る極めて貴重な史料たるを失はぬ。尙ほ此の戰に戰死を遂げた塙軍の首將レオポールド公の最後の折に着用してゐたと云ふ鐵の鎖子鎧くさりかたびらは其製法の古拙なるより、確に其の折のものと首肯された。尙ほ戰爭直後百有餘年に描かれたと云ふゼンパハ戰の繪畫は幅廣き木板の上に畫かれていとど感興を惹くものであつたが、戰場に横はる死傷者の間に奔走して傷者の繃帶や看護に努むる尼僧の數々にあるを精細に描き出してゐるのは中世期に於ける修道院の尼僧の活躍も偲ばれて最と興深く打ち見られた。

かくゼンパハ戰に對する感興の頻りと昂められた折柄、宿舍の主人よりして該戰場の探訪の極めて容易なのを語り聞かせられたので、矢も楯もたまらず、十月の十三日に其の地を訪ることに取り極めた。朝の九時五十分の列車に乗じてルツェルンを出でて西北に向ひ約三十分時程で早くもゼンパハの小驛に下り立つた。それから郵便馬車に飛び乗つて北に向ひ、ゼンパハ湖の東岸を縫ひ行けば約十五分許で、所謂ゼンパハの小村に達することが出來た。村外れの小學

校の前に一箇の噴泉があり、傍への碑面に題して『ゼンパハ』の戦勝者に捧ぐ』と記してある。

村の東端の小徑を北に向ひてダラ／＼坂を隴圃の間を縫ひつつ進む。圃には大抵林檎の木が

植ゑられ、牧場も其の間に散在する。正午と

云ふに目指すゼンパハの古戦場に辿り着いた。

圃地に牧場、それに雑木の生ひ茂る林もある。

南方霞の模糊たる間にゼンパハの湖面を望み、

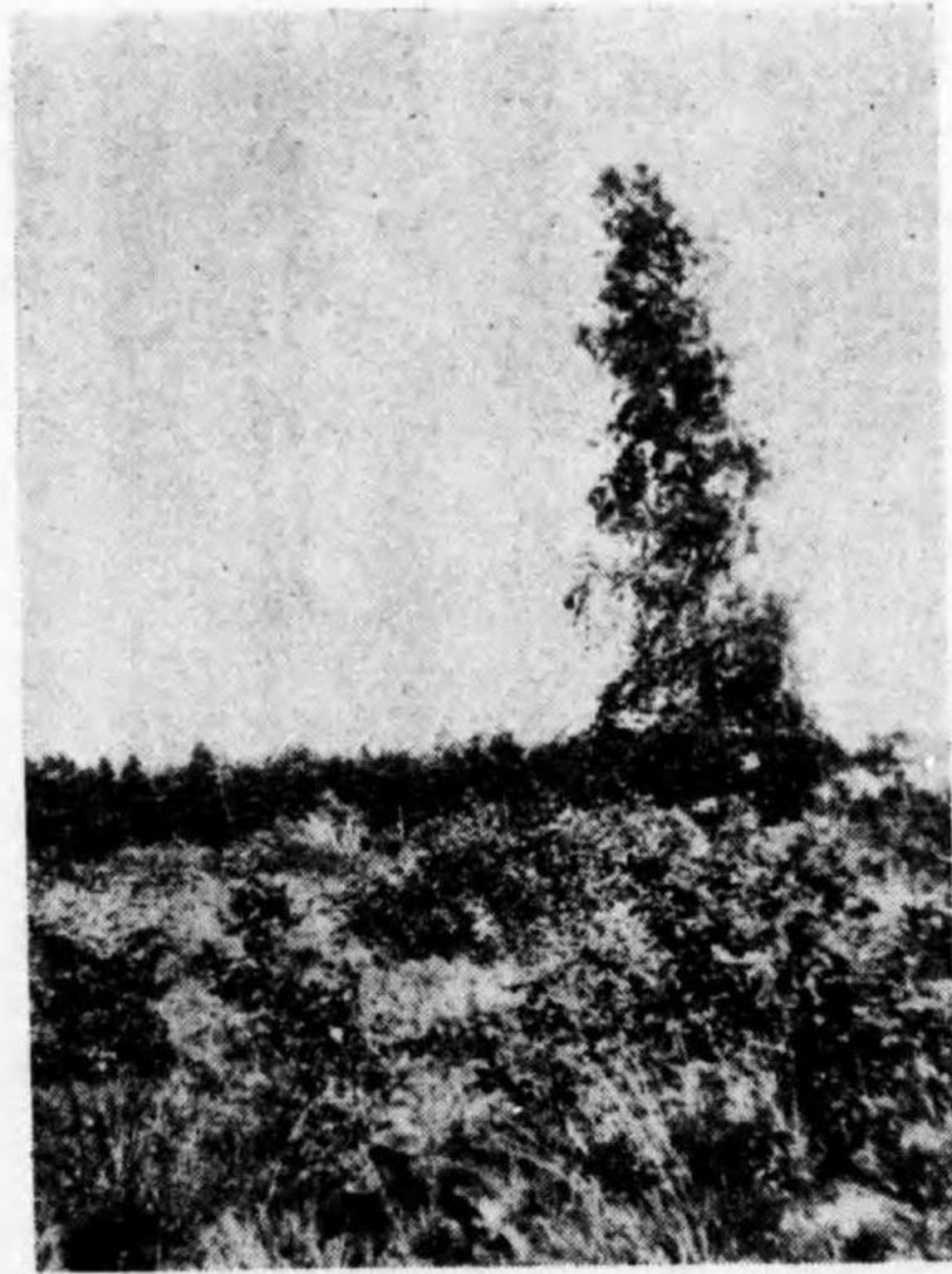
遠望は極めて廣潤である。戦は人も知る一三

八六年の七月九日で、一方は塙將レオポール

ドの率ゐるオーストリア、バーゼル、ウイツ

テンベルヒ、フライブルグ、アールガウさて

ゼンパハの古戦場



はシュワーベンやエルザスの大軍、これに敵たふたシュワイツ軍はルツエルンやヴレンスの農民軍から成り、壯烈無比な格闘戦を此の原頭に演じたのである。兩軍は相接して戦は容易に決しなかつたが、傳説に従ふと、此の折シュワイツ軍の中からウインケルリードと稱する一箇の勇

夫が現はれて、「諸君よ余は諸君の爲に一條の路を開かん」と叫びつつ、兩手を擴げて出来る丈多くの敵槍を引つかかえ、其の身は勿論敵槍に貫かれて絶命したが、シュワイツ軍は其の隙から躍り込で遂に散々に敵軍を破つたと傳へてゐる。

路の東側、牧場の中に一叢の縦の林があり、其の下に自然石を立てて、「此ここにウインケルリ

ードが、其の同僚の爲に一條の路を開いた

と獨逸文で刻してある。

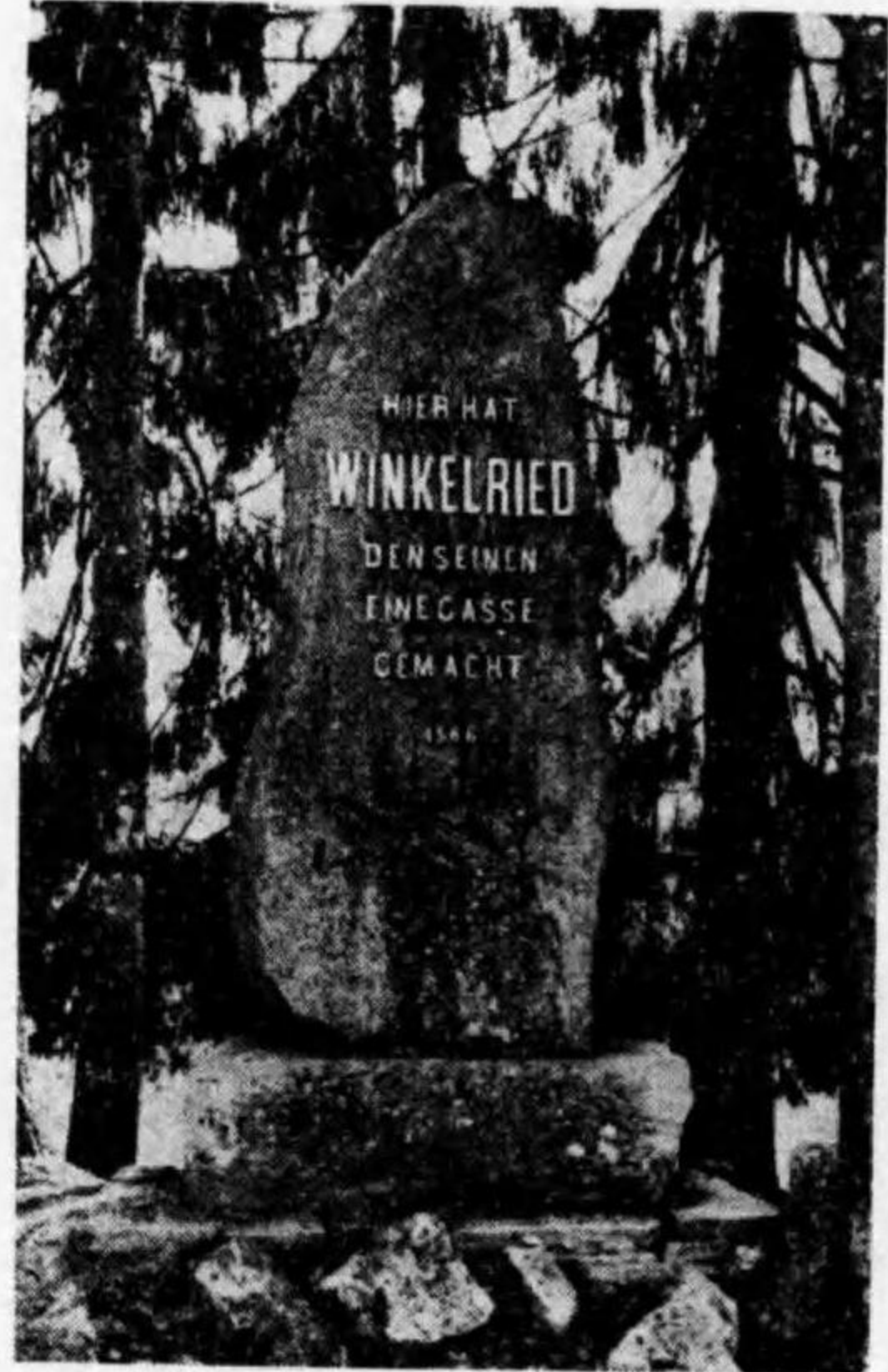
路の西側なる圃地の中に一箇の小やかな

祠堂があり、堂内の四壁に俗惡な筆もてゼ

ンパハ戦の模様を描き、尙ほ塙將レオポー

ルドは勿論のこと其の部下に立つたバーゼ

ル、ウイツテンベルヒ、アールガウ、エル



ウインケルリードの碑

ザス、シュワーベン等の同盟軍將士の紋章が細々と描かれてある。祭壇の後の小堂は特に一段の古色を帯び、塙國の帝室から寄せられたレオポールドの油畫を掲げ尙ほ確にゼンパハ戦に用ひられたと思ほしき塙軍の長槍やシュワイツ軍のハレバルドが處狭きまでに並べられてゐた。

堂の側には別に一小堂を造らひ、戦場で掘り出されたと傳ふる累々たる白骨を積み重ねてある更にまた堂の前には雑草の中に埋れて一三八六と刻した、最とも古々しい苔蒸した二基の石の十字架が立てられてある。戦争直後に立てられたものと思はるる。

余がルツェルンで蒐集した拉典文の文書には戦争當時に記された極めて面白い記載があるので、序に、今、此に譯出する。

『一三八六年七月九日、ゼンパハ町の附近にて、

ルツェルン人及び其の同盟者たるヴレンス人が一方に立ち、他方には、オーストリア公レオポールドが、公領内將た男領内の戦闘員、非戦闘員を合せて立ち、ルツェルン軍は花々しき勝利を得た。其れ故（ルツェルン方は）イエス基督の名譽の爲に永久に此の日を祝ひ、又聖母の名譽の爲に施與をなすべきことにする。そしてそは一人について麵包の一片、或は一人について金十フロリンまで與ふることにする」云々。

シユワイツ人にとつては寔に意義深い此の戦勝の日、即ち七月九日、を記念する爲、毎年當日を卜してゼンパハやルツェルン人が面白い模擬戦を演ずる。奥軍側は長槍を持ち、シユワイツ軍は「ハレバルド」を揮ひて角闘の模技を演じ、良がて最後にウインケルリードに扮する一

老人が現れて大團圓を告ぐるのを例とする。

晝時をも過ぎたので傍への料亭に憩ひて、粗末なる中食を済まし、もと來し路をゼンパハにとつて還へし、午後一時の列車に搭じて、またもやルツェルンの客とはなつた。

五九、イタリヤ雜觀

昭和三年の一月十四日奥太利のインスブルックを出で、嘗て文豪ゲーテの通つた名代のアルプ越、ブレンネルの峠を経てイタリヤの新領土トリエントに出た。ブレンネル越は積雪阪路を閉して壯觀極まり無く、スキーを試むる青年男女の此處彼處の山阪に群集するを見た。トリエントはチロルの名邑四圍悉く山であつて天險の地である。もと奥太利領であつた時から、多数のイタリヤ人が茲に住してゐたので、イタリヤ領に還つてからの該地の得意と活躍とは言ふまでも無い。停車場前に立てる以人の典型、一代の文豪彼れダンテの巨像は數多き美しい花輪に飾られて居る。市の郊外に程近い要塞のほとりには、大戦當時に以軍に通じて奥軍の惨殺するところとなつた幾多殉難の士の墳墓がいと莊嚴に造り成されてある。民族的敵愾心の盛なことが斯様な譯であつては、永久平和の實現も蓋し容易なことでは無いであらう。

月の十五日にトリエントを出でヴェロナに向ひ、夫からヴェニス、ラヴェンナ、ボロニヤを見、セントフランシスコの靈地であるアシジを訪ひ、ローマに至つては前後足を留むること三週日、夫から一路南に向つてナポリに至り、折柄滞り中の濱田博士に伴ふてポンペーの發掘地などを探り、良がて博士の歸國をナポリの埠頭に送つて、サレルノ、アマルヒと順次に歴遊し、ギリシヤ時代の植民地ペスツムに至つては其の時代の古建築ネプチューンの神祠が今尙ほ儼然として残存するのを觀、これから西南海を超えてシシリ島の史蹟を探り、又もや汽船に乗じてもとのナポリに還り、更に北上して再びローマを訪ね、夫から北に向ふてシエーナ、ピサ、ミラノ、ゼノアと逐次イタリアの史蹟を巡覽し、二月の十五日ゼノアを出でて西の方フランスに向ふた。

イタリア全土は云ふまでも無く世界歴史の寶藏であつて彼のギリシヤに於けるが如く眼に映する限り、一木一石も皆是れ、幾千年の歴史を語り、偉人傑士の活躍を想起せしめないものは無い。ことにローマは流石に『永久の都』と語り傳へただけであつて、モンヌ・パラチヌス等所謂七丘の上には今に尙ほ壘々たる廢墟を止めて居り、コロッセウム、フォラム・ロマンム、さてはハドリアヌス帝やカラカラ帝の壯大眼を驚かすに足る大浴場の址等歴々として指點するこ

とが出来ぬ。發掘された幾多の廢墟には何れも門柵を造らひて、我が壹圓内外に當る高價の入場料を徴收してゐる。博物館や名勝地の入場料でもイタリア位高價なところは減多に無いと言はれてゐる。それでも觀光の客は各國から入り込んで四季折々、特に春陽の候などは觀光客で何處の客舎も一杯の姿である。就中觀光客の中最も多數なのは何と云ふてもアメリカ人であらう。歐洲各地殊にイタリアの各名勝地でアメリカ人を見ざるところは殆ど無い。實にイタリアの如きはアメリカ觀光の客を以て常得意としてゐる。イタリアの汽車は可なりに粗末なやうではあるが、それでも車内の清潔は中々に善く行届いて居り、一二等の設備などは遙に日本以上であらう。主なる停車場では大抵辨當賣りがやつて来る。大きな紙の袋にパンの二切れ、カツレツ、ソース、果物それに暖かい「マカロニー」赤葡萄酒の小瓶をさへ添へ、簡単なナイフやフォークをまで挿入せるのは寔に輕便であつて、態々食堂車に通ふことなどよりも遙に善い。イタリアの赤葡萄酒は滋味が多くてフランス出來の夫等よりも遙に善いなどいふ人もあるが何うであらうか。余は赤葡萄酒よりも同じイタリア産のフラスカチの白葡萄酒の方が遙に甘いやうに思はれたが、こは素人風の觀察かも知れぬ。イタリア各地殊にシシリ島の名勝地には奧太利人、シワイツ人さては獨逸人等の經營せる旅館が殊に多く、獨逸語を話すには可なりの便利が

あるやうに思はれた。ローマあたりでは大戦後奥太利人の經營せる旅館が可なり澤山イタリア政府に没收されたとの事である。何處の停車場にも必ずナポレオン帽を冠れる憲兵が二名と黒シャツの巡査が一名宛必ず堂々とプラットフォームを濶歩して、列車の着く毎に警戒の眼を光からしてゐる。この黒シャツの巡査は志願巡査で政府から俸給を貰つて居らぬとの噂があるが何うであらうか。余が南イタリアのペスツムを訪ひ、バチパリヤに至つてシシリイ行きの列車に乗り換へんとせる折、持合せのイタリア貨幣が無いので大變困つて居るのを例の黒シャツの巡査が見かけて親切ごかしにレストーランに余を導き、茲に兩替をさせてやるとて安心をもとめ酒を酌めて我輩を物にせんとしたことも覚えてゐる。斯様な譯であるので例のムツソリニー配下の黒シャツ巡査隊も案外當てにならぬ瞞かしものであるやうに思はるる。さればとてムツソリニーの勢力なり人望なりは大したもので何處のレストーランにも必ず彼れの肖像を飾り、辻々の便所の壁などにも墨もてムツソリニーの似顔らしきが數多く描いてある。各市各地方の秩序も可なり嚴重に行はれて居り、以前には能く停車場などで旅客の荷物を奪ひ去つたといふやうな無頼の者の話を聞かぬでも無つたのであるが、今はかかるやうなことは殆ど無い。

流石にローマは舊教大伽藍の存するところ、天堂の鍵を預れるセント・ピーターの遺鉢を傳

へたローマ法王の鎮座ましますところであるから、信仰の盛んなことは市井の間にもト知することが出来、尼僧の率ゐる學生團、僧侶學生團などが彼方此方を往來してゐる。法王宮のグチカンに藏せる珍寶器什の中にも教門所屬のものが數多く存在して居るのであるが、就中最も吾人の眼を惹いたものは、天正の昔、我が九州の大友、有馬、大村三侯から、使節をローマに通じた際の、其の行列の有様を描いた大幅の繪畫と、慶長の昔、伊達政宗から羅馬法王に奉進せる其の古文書の今に儼然と保存されてゐることである。墨痕實に鮮かに今猶ほ當年の趣を傳へ往昔邦人の活躍が如何に盛であつたかを物語つてゐる。其の他イタリアは所謂美術の國で、グチカンの美術館を始め至るところの博物館、繪畫館さては名寺大刹の中に、ラファエル、レオナルド・ダ・ヴンチ、チントレット、ボチセリーさてはミケランジェロ等の名品大作が殆ど無數に盛り立てられており、眞に百花燎亂の趣のあるのは、流石に歐洲の第一位に居る。其の地方の風光に於ては兀山赭岩其の間にそそり立つ中古式城塞の址さては丘陵上に立てられた聚落等見るからに我が國などでは容易に見ることの出来ぬ光景である。丘陵の上に村落の作りなされたは平地に於て猖獗を極むる「マラリヤ」熱の禍を避くるが爲であると聞いてゐる。さて山水の明媚なるをローマの附近に求むればローマの南アルパノの山間に於ける「ネミ」の湖が之で

あらう。ローマから輕便で約一時間程南に下ればアルパノに出で、夫より更に三十分程山路を分け登ればジエンツアノなる小部落があり、阪路に添ふて造りなされた聚落であつて、脚下の凹地に深く湛ふるネミの湖、橄欖の林はその四周を閉し、柚人の炭焼くらん如き烟も遙に見え、眞に稀に見るところの仙境である。ここは森鷗外の譯せる即興詩人にも見えた一仙境であつて、同書に「彼方の山腹の尖りたるところにネミの市あり、其影は湖の底に印りたり。我等は花を採り、梢を折りて、且行き且編みたり」などあるも思出でらるる許である。

シシリイでの觀光も忘れ難き記憶を得た。余の同島に遊んだ折は丁度二月の始めつ方であつて、エトナの火山にも眞白く雪の降り積めるを見たのであるが、日中の暖かさは格別であつて海岸のそぞろ歩きにも肌を汗するを覺えたのである。我が國の山櫻にも似たらん如き花の彼方此方の山麓に咲き揃へるものと面白く眺めなされた。更にシシリイの各地に於ていと面白く感じたのは美々しく飾り立てたる小馬に、これ又華麗なる裝飾を施こせる花車を結び付け、これに旅客など打乗せて悠々と街路を練るの光景であつた。二月といへば北歐は尙ほ荒涼たる光景を脱し得ぬのであるが、ここ南歐は早くもかかる明るき氣分に充ち満ちて來たのである。タオルミナからシラクサ、それからジェルヂエンチ、パレルモと古代希臘の植民地の遺跡やらサラ

セン時代の遺物など具に觀覽の機を得たのは寔に幸運のことであつて今尙ほ湧然たる感興を覺ゆる次第である。

六〇、シラクサの廢墟とアレツサの泉

昭和三年の二月十一日、シシリイ島の東岸タオルミナの停車場を午前十時廿七分の列車で出で立ち、シラクサに向ふた。右手には高くエトナの火山を望むことが出来る。噴烟は縷の如く殆ど明かにこれを認むることは出来ぬが、山骨を包める白雪は皚々として又なき壯觀である。左手には蒼海渺茫として水天髣髴、其の間に黒烟を残しつつ去來する大小の艦船、崖端に挫け散る濤の花、眞に心地よき眺めである。

汽車はいつしかカタニヤを過ぎ午後一時十分と云ふに目指すシラクサの驛頭に着いた。直ちに汚らしき馬車を賃ひて「コルソ・ウンベルト」と名付る大路を南に新市街に至り、「オテル・カブル」と云ふに旅装を解いた。

旅館に憩ふこと少時市内の見學に出で立つた。氣候は我國の夫れにも比して餘程暖かに、櫻の花らしきが此處彼處に咲き出でたるなど流石に南歐の風物も惚ばれて心浮立つ許である。嘗

と烈風の時に街頭を煽つて砂塵を揚ぐるにはほどく閉口した。

往昔ギリシヤなるドーリヤ人の此處に植民地を開いた際は周圍八里人口は百萬を算したと謂はれてゐるが、今は市況も衰へて舊時のやうに盛では無い。街衢の中樞たりしところは疊々たる廢墟と化し、却て南方海中に長く斗出せる半島の如きに、今日の所謂シラクサの市街は造り成されてゐる。其の新舊兩市街を連ぬる咽喉の如き地帯の東に「ポルト・ビコロ」即ち小港と稱するものがある。西には所謂「ポルト・グラント」と稱するものが灣入してゐる。大港の水は次第に其の深さを減じ來れるが如きも尙ほ且つ大船の碇泊せるものが多い。往時の壯觀もさてこそと思ひやらるる許りであつた。紀元前四一五年アテネの勇將ニキアスがスパルタの與國なるシシリ・シラクサを攻撃し、其の後、勢銳く殺到せるスパルタ軍の爲に包圍され、雄圖空しく水泡に歸し果てた。其の昔みの悲惨事も此處「ポルト・グラント」で行はれたと思へば、吹き來る微風も何と無く悽慘の氣を漂はすかと怪まれた。

「ポルト・グラント」の東岸に沿ひ、「アレツサ」通を南すれば、綠樹蔭暗き一箇の廣場がある。此處に古代の數學者で發明家である彼れ愛國の權化アルキメデスの立像が建てられてゐる。勿論純白の大理石で造られ、反射鏡を手にしてローマの艦隊を焼き盡さんすと待ち構へた

その堂々たる雄姿を表はしてゐる。

彼れは此のシラクサの生れで、其の獨創的天才を利用して屢世を驚かすに足る幾多の新機械を發明し、これで以て、度々ローマの大軍を惱まし、遂にローマ軍に捕へられて悲惨の最後



像立のステメキルア

を遂ぐるに至つたのは皆人のよく知るところである。やがて廣場の南なる洞門を潛れば圓形の小やかな池水がある。鯉鮒の類が頻りと其の間を游泳してゐる。

池中にはまた數百莖の「パピルス」が叢生し、何れも長き三四尺の綠莖に白毛の如きを冠してゐる。「パピルス」

はもとエジプトなるニールの河畔に生じ所謂パピルス紙の原料となつたものであるが、其の後エジプトの方面には殆ど全く其の跡を絶ち、却てアラビヤ人のシシリ島に將來せるものが、此のアレツサの池さては此より二里餘を隔つるシラクサの郊外アナポの河畔にいと美事に繁

生しつゝあるのである。尙ほ傳説に依れば水澤の女神アレツサなるもの河の神アルフェウスに追はれてギリシヤなるペロポネソスの半島を出で、此處シラクサのアレツサの池には至れるなりとか。さればこそ此のアレツサの泉は遠く森漫たる地中海の水を隔ててペロポネソス半島のアルフェウス河に其の水を通ずるのであるなど。いと誠しやかに池禦る男の語れるも興深く聞きなされた。奈良の二月堂の若狭井の水が北陸の彼方に遠く水脈を有するとの其の面白き言ひ傳へも思ひ出でられて心に深く感興を感ぜしめられたのである。

やがて晩景にも近づきぬれば、もとの宿舎にと歩を廻らし、其の夜は其處に熟睡を食り久方ぶりに旅の疲を休めたのである。

明くれば二月十二日、朝の程から馬車を賃ふてウンベルト通を北し、舊シラクサの廢墟を訪ふことになつた。廢墟の中で殊に吾人の目を惹いたの

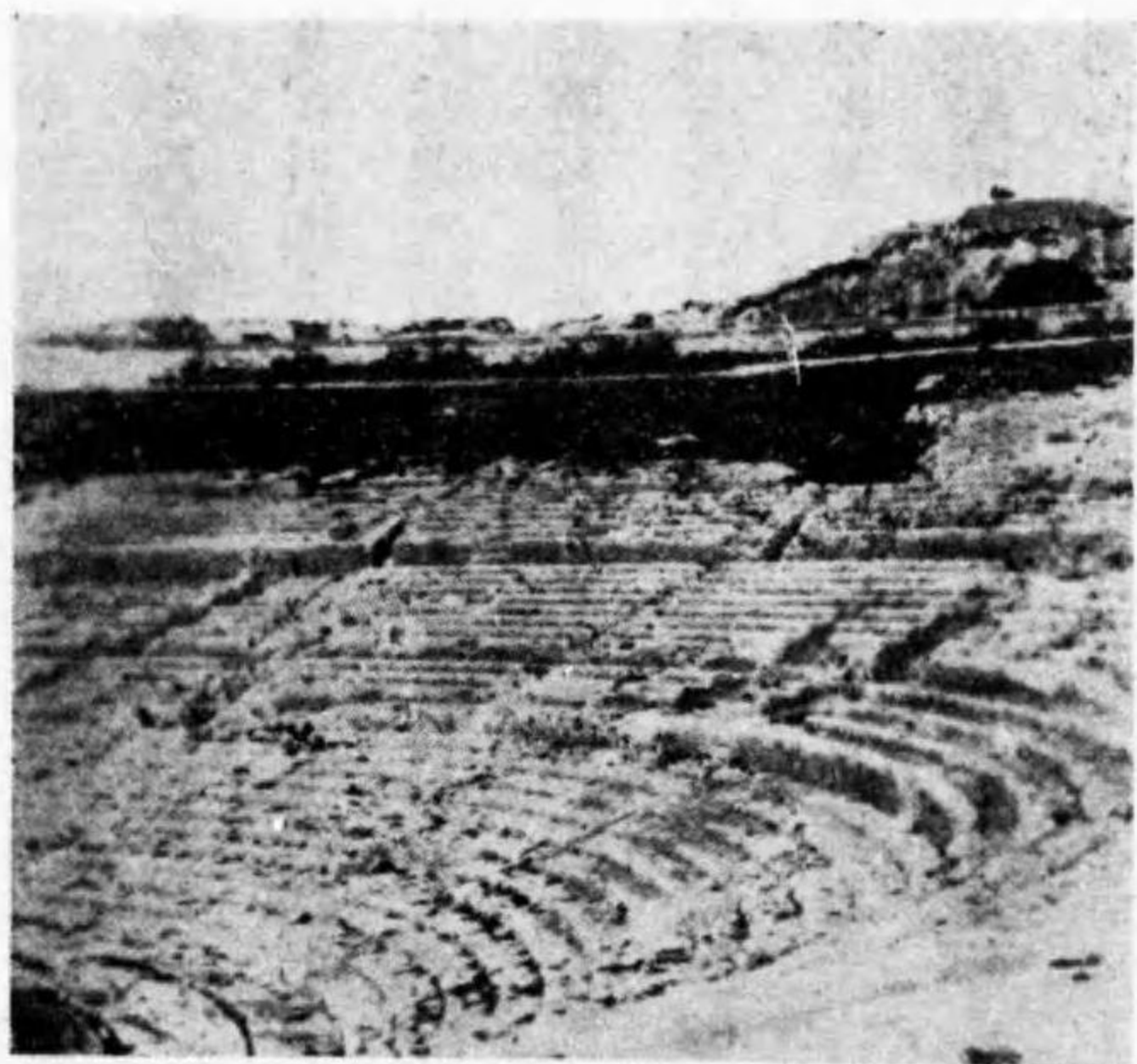


スルピバの畔河ボナア

はギリシヤ時代に建設された劇場の跡である。凡らく紀元前第五世紀の比、シラクサの王ヘロン一世に依つて建設され、後ローマ時代に改修を加へられたものである。「オーゲストラ」の周りに半月形に造り成された階段式の觀覽席は自然の岩石を削つて、いとも雄大の趣を供へてゐる。

觀覽席の間々に導かれた歩道に往昔の轍の址の其の儘に残れるは、ギリシヤ、ローマの時代、劇場の中まで車を乗り入ることが高貴の人に許されたことを證するものでいと面白く眺められた。

其の側に「オール・デス・デオニソス」と唱ふる、見るからに巨大な、可なりに深い洞穴がある。自然の岩石から造り成された洞穴で、幽暗なる其の奥は容易に見極むることが出来ぬ。入口は三角形をなしてゐる。其の中では如何な低き微音でもいと明瞭に



シラクサの古劇場

手に取るやうによく聞える。

傳説に依ればデオニソスの神、此の洞穴の上層に座を占めて洞内なる捕虜を監守せるところ

であつたとか。さればこそ「オール・デス・デオニソス」即ち「デオニソスの耳」と唱ふるも故あるかなと感じたのである。

やがて車を移して隴圃の間を過ぎること十數町、土俗、「ラトニヤ・デ・カプチニ」と云へるところに至る。廣さ幾十頃の地域にわたつて平地より低まれること二三丈、園池あり、洞穴あり、石柱あり、記念碑あり、墳墓あり、深井あり、其の間を縫ひて小徑を過ぐれば圍繞盤廻して、突然迷路に徃ふの感がある。傳へ云ふ。往者アテネの勇將ニキアスが「ポルト・ブランド」でスパルタの大兵に囲まれた折、アテネ軍の大半はあはれ港頭に無慘な骸を曝すに至つた。が、捕虜となれる七千のアテネ兵は空しく此の凹穴に幽囚されて、飢餓の困苦に悲慘な最後を遂ぐるに至つたとのことである。

爾來星霜茲に幾千年今尙ほ當年の幽暗を其の儘に傳へて雨の日、風の夕には鬼哭啾々の叫の聞かるるやうなこともあるとか。

此の夜再び前の旅舎に疲れを休め、翌十三日の午前、汽車に搭じて一路西進ジェルジエンチにと向ふた。

六一、 ヴイラ・アドリアナの逍遙

ローマの東北約一時間程モント・カチリオの南斜阪、北にテンペの川を負ひて極めて幽邃の一區がある。名づけてヴイラ・アドリアナと稱へて居る。意を侵略に絶ちて只管に世界の平和に勤しみ人權平等の主義に依つて人類和樂の理想境致に至らうとした彼れアドリアヌス皇帝が晩年に別墅を營み、普ねく世界の珍奇を一處に網羅せんと努めたところである。

昭和三年の二月十八日初春の空は名残無く晴れ入り、温風も徐かに吹き至つて野外の逍遙にはこよ無き好日和である。朝の午前九時と云ふにローマの東端に近きポルタ・サン・ロレンソの停車場に至り、輕便鐵道に乗つて東北、ヴイラ・アドリアナに向ひ、午前十時といふに目指す該舊蹟に近き小やかなる停車場に下車した。それから東南に向ひて暫し隴圃の間の窪道を降れば、ヴイラ・アドリアナの入口に出た。入口から徑は東北に向ふて進んだ。徑の兩側に我が國の杉にも似たらん松柏科の植物の鬱々として小暗き陰を投ぐるも面白い。良がて希臘の劇場と云へるに出た。所謂希臘風に摸して造り成された爲、此の名を得たものであらう。小規模乍ら半圓形の階段式坐席も往時の儘に残つてゐて、同じく半圓を描いた歌唱場、オケストラ背後の舞臺は一段高い

長方形の石壇から成る。歌唱場の中央に寂しげに立つドリヤ式の大理石柱も何と無く趣がある。

劇場の背を小徑に添ふて北に入れば、パレストラと稱するもとの宮居の一部と思はるるところの片隅に宏大なる貯水池の設備がある。今に尙ほ清冽の泉の滾々として湧き来るのを見る傍への圃地の中には亭榭園林の荒廢に歸したる儘殘存するのをも見受けた。

良がて劇場の東を東南に向ひて木蔭小暗き窪道を辿れば徑の左手に「ニンフの宮」の廢墟が残つてゐる。圓屋堂の礎石、希臘式柱頭の破片など往時の盛觀も偲ばれて轉る今昔の感に堪へぬのであつた。窪道の突當りは所謂ポアキールの遺蹟であつて離宮の玄關口に當る。長方形の柱廊に圍まれた大園庭であつて園庭は今に尙ほ緑の氈を布きたらんやうな芝生である。芝生の中程に古色蒼然たる一箇の古池があり、湧き出づる泉を湛へてゐる。柱廊の北端を限れる二條の長壁は剪篋式に様々なる石を積み上げ、今に尙ほ往時の壯觀を顧はせる。芝生の上は眺矚殊に宜しく、寫眞機を手にして廢殘の荒墟を逍遙するアメリカ婦人なども亦畫中の人たるを失はぬ。

ポアキールの東に接して大規模と云ふにはあらねど、程宜き競走場の跡がある。南端に弧形

を描ける大體の長方形であつて、今は周縁の礎石を留るのみであるが、一面離々たる荒草に閉されてゐる様も哀れである。其の東南丘陵の間に涉つて、「テルメ、ピコレ」、「テルメ・グランヂ」と稱する大小兩箇の浴場の址が残つてゐる。脱衣室や圓形浴室の址なども今に尙ほ、其の設備の概要を指點することが出来る。

是等の浴場の南に「カノプス」と名付くる兩側は高く斷崖を成し、崖端に添ふて幾多の洞室を造らへ、南端の行き詰りに、一層大きな龕洞があり、其の中に泉池の設備も構へられてあるのが見える。傳ふるところに依ればアドリアヌス皇帝の埃及流の諸種の祭典を折々に舉行せるその場所であるとか。「カノプス」の前なる芝生に腰打ち掛け、霞棚延くローマの近郊を南に眺めつつ、齋らせる行厨を發きて舌鼓をうち暫し身の俗界にあるのを忘れた。



(ナアリド・ライヴ)スプノカ

良がてスタヂオの北に續ける土窖門クリプタポルチコと云へる地下の廊道を過ぐれば「クワーチエール・デュ・ヴィジリ」と稱する方形の長壁に閉されたところがある。其の内側には幾多の斷柱が林立してゐる。もと家具の貯藏處であつたところであるとか言はれてゐる。

其の東に續く「パレスタ・バシリカ」と稱する一部は所謂「アドリヤヌス」の常に在ましし處と言はれて居り、斷礎の址は歴々として往時の壯觀を窺ふに足り、中程に近く、玉座の間と傳へられたところもある。千七百有餘年の昔、徳化一世を蔽へるアドリアヌス帝の心長閑けき此の山莊の一室に日夕起臥せられたのを顧へば、感慨の殊に深きものがある。此のバシリカの北側なる一帯の芝地はガルデイノと呼ばれ、もとの正殿の前栽に當れるところなるやう思はるる。

これに續ける北側の一郭はもとの圖書室であつて、「ビブリオテカ」と呼ばれ、半ば頽れ落ちた而かも舊觀を想望するに難くは無い壁柱の殘墟が累々たる有様である。

「ビブリオテカ」の西に續いて「ナタトリウム」と稱する圓形の堂屋が可なり完全に殘つて居る。内部には矢張、圓形の池水を湛へ、中に大理石の斷柱に飾られた小嶼がある。

良がて元來し路をヴィラ・アドリアナの停車場側に引き還へし、東北に向つて緩かな阪路を攀づれば橄欖の林は路の左右を挟みて一鳥鳴かぬ静けさである。

阪頭にチヴオリの西端を限れる聖ジオヴンニの公園がある。崖端の遠望殊に宜しく、園内に殘る大理石柱なども何となくローマ時代を偲ばしむるものがある。

チヴオリはアニオの川に繞られたる石灰岩質の陵上にあり、風光明媚の仙境として既に帝政時代から知られてゐる。アウグスツス帝始め以後の諸帝は多く此の地に別墅を營まれたと傳へてゐるから、往時を偲ぶ斷礎の址も折々は發掘せらるるとか言はれてゐる。町の東北崖端にホテル・セヴィリヤと稱へたる料亭があり、亭の庭傳ひにテーブルツス及びジヴィルの最とも古色を帯びた二つの神祠を探ぬることが出來、殊にアニオの水が斷崖を決して飛下幾十尺珠と碎け華と散る南歐稀に見る懸瀑を一眸の裡に收むることが出來る。余も此の料亭に憩ひて一杯の赤葡萄を啜りつ、暫し旅の愁を忘れ、夕景チヴオリの驛から輕便に乗つてローマのポルタ・サン・ロレンソに向ふた。

六二、イスパニヤ雜感

昭和三年の二月二十五日イタリヤのゼノアを出でて鐵路西進フランスの領域に入り、ところ／＼の南佛の史蹟を探ね、月の二十九日にはイスパニヤの領域に入つてパロセロナを觀、首都

マドリツドに入つた。汽車中多數の憲兵が往復して、頻りと旅客を物色し、旅券の檢閲も可なりに頻繁である。パロセロナからマドリツドに至る間凡そ三回の檢閲を受くるに至つたのは實に一驚を喫するの外は無つた。聞くところに依ればイスパニヤは貧富の懸隔が實に甚しく、富めるものは實に數箇村を兼併するの有様であり、貧しきものは口を糊するにも尙ほ足らぬやうな状況であつて、一度煽揚を試むるものあらんか、忽ちにして革命の騷亂も起る無きを保せざるやうな次第であり、さてこそ行旅の檢閲も斯くの如く嚴重を極むることである。

余のマドリツドに入つた時は丁度議會の無期停會の最中であつて、街頭の有様も啻、何となく騒立ちて見えたのである。

マドリツドではブラドの繪畫館にイスパニヤ巨匠の力作を賞し、ドレドに至つては大伽藍の莊麗を掬し、グラナダに至つてはアルハンブラの輪奐の美に驚きセビリヤではコロンバスの眞蹟に接し轉る偉人の風貌を偲んだのである。三月の十日マドリツドに引還し十一日一路北進ピレニール山を超えてフランスの地に向ふた。

六三、トレドの大伽藍

昭和三年三月の四日朝九時マドリドの南方メデオヂヤの停車場から列車に乗り込みドレドの見學に出で立つた。汽車は南に向つて馳せ、平野の間を過ぎ行くに、見渡す限り麥隴は浩々として相連なり、橄欖の林は其の間を點綴し、桃杏の花の如きさへ春の日向に咲き匂へる様によ無き宜い眺めである。十一時と云ふに目指すドレドの驛に着した。それから自動車を賃ふて西南に馳せタホの流れに架するアルカンタラの橋梁を渡り其の名も同じいアルカンタラの門と云ふのを過ぎたが、これは城塞の門にも比すべき極めて宏壯のものであつた。

ドレドの市はタホの流れに三面を包まれた一帯の岩壁の上に位し、市全體が天險要害の地勢を備へてゐる。さればこそ既に紀元第六世紀の比、西ゴート王國の王城としてイベリヤの半島に雄視するに至つたのである。

今や余はドレドの大手とも云ふべきアルカンタラの門を入り、岩壁を周り周りつ、遂に高臺の上に出で、夫から一路西南に向つてトレドの街衢を横斷し、市の西端に近い「聖トメの會堂」に至つて車を下つた。

「聖トメの會堂」はカスチラ派の畫匠エル・グレコの名畫を藏するを以て其の名が遠近に知られてゐる。今日は恰も日曜のこととて禮拜に集まる老若の爲めに院内は尠なからず雜沓を極

めてゐたが、漸くにして群衆の隙を縫ひつつグレコの大作に接することが出来た。畫は一三二三年に物故せるオルガス伯の葬禮の光景を描いたものであつてグレコの辱知に係かる三十人の似顔を會葬者の中に書き添へてあると言はれてゐる。言ふまでも無くイタリア畫に見ゆる眩耀の色彩を捨て去つて冷やかな灰色の筆致を加へてある。「聖トメの會堂」から緩かなる坂を西南に下れば路の左側にグレコ博物館と稱するものがあり、此に此の畫匠の努力を語る十九點の大作を陳列する。何れも色彩筆致に於て彼れ一流の特色を表現してゐる。此の博物館の南に隣つて「グレコの家」と稱するものがある。畫伯の居室や禮拜堂も往時の儘に存し、前栽の營みも瀟洒たるものがある。

エル・グレコは本名をドメニコ・セオトコブリと云ひギリシヤに生れたに依りグレコの名を得たと言はれてゐる。イタリアに至つてチチアノの畫風を學び、後、一五七七年にはイスパニヤに涉つて此處トレドに住居を定め、彼れ一流の畫風を開拓するに至つた。トレドではヴィレナ公の邸宅の一部に住居を許されたが、其の住居こそは今に残るカサ・デル・グレコであつたのである。

もとの「聖トメ會堂」に引き還し、傍への料亭に憩ふて中食を認め、それから一路東北に進んで當地第一の大伽藍に詣でた。西ゴート王國時代既に此の地點に大きな會堂が存在してゐたと傳へてゐるから、現存の建物が十三世紀以降のものであるにしても、伽藍の創立は可なり古いものであると言はねばならぬ。

寺總體の結構は初期ゴテイツクの形式を有し、堂内に於ける彫刻、又硝子畫の豊麗なることは驚くべきものがある。堂内陰暗にして遙か彼方の祭壇に巨燭のゆらめくがほの見え、音々何と無く崇嚴の感に滿されざるを得なかつた。

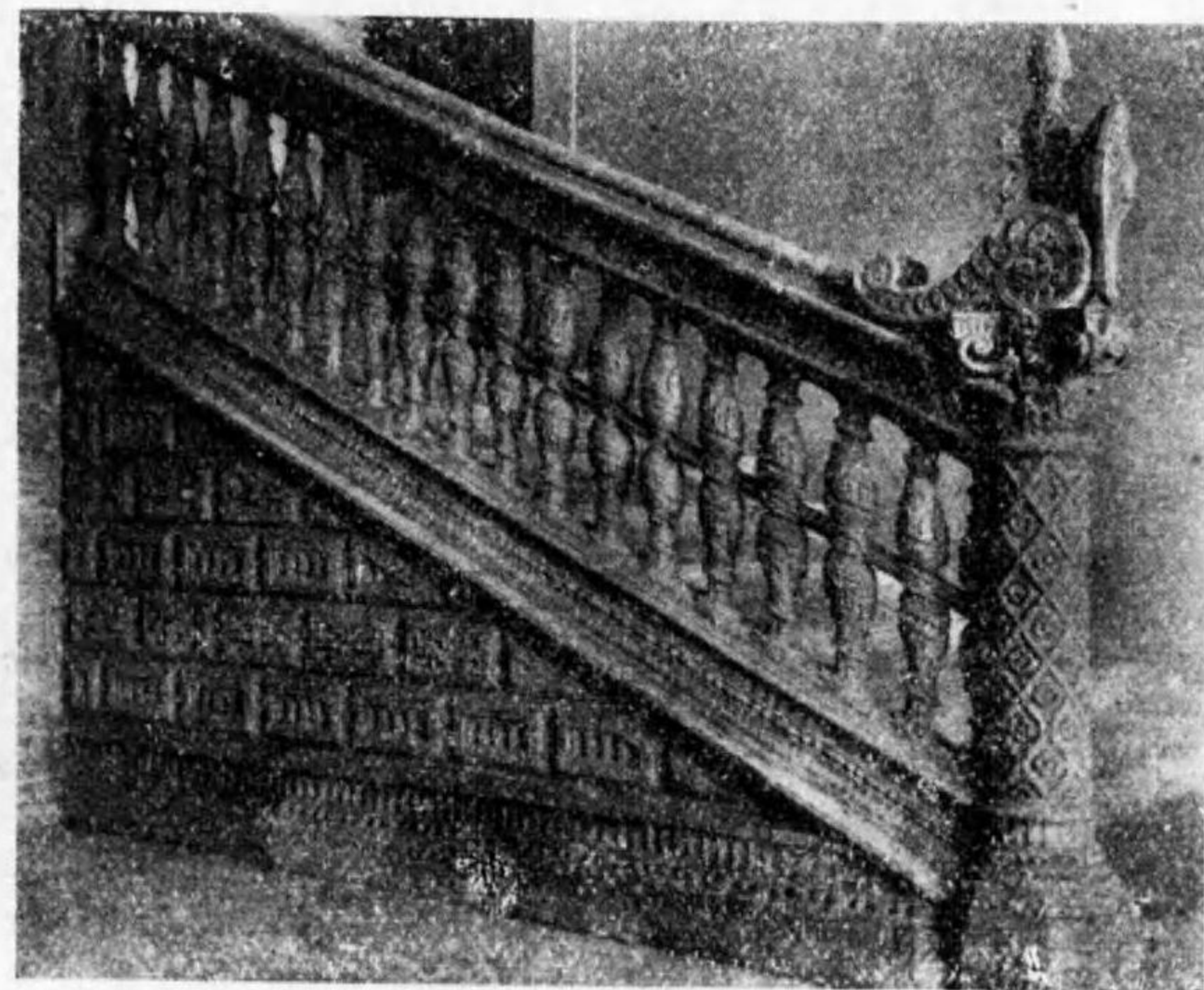
天正の昔、我が大友、有馬、大村三侯の使節が遙に羅馬法王を訪ねた途すがら、このトレドを見舞ふたと云ふことは西教史にも見えたる事實であつて、凡らくは此の伽藍にも詣でて禱拜の禮を執つたことは蓋し疑が無いであらう。ことに使節の一人であつたドン・ミセル、千々石清左衛門が此の地で病氣に冒され、具に辛苦を嘗めたと云ふやうなことも西教史に



家のコレグレコ

傳へて居る。東邦の遊子爲に憮然として三百數十年の昔を偲び、感慨無量なるものがあつた。伽藍を出でて東北に向へばアルカサールと稱する城塞的建築があり、復活式の宏壯な石造建築である。此處はトレドの最高點に位し、四隣の山川を一望の下に俯瞰し羅馬時代既に要塞が置かれ、西ゴート時代にも此處を王城に使用し西班牙王の時代には屢々これに修築を加へて愈々雄大のものたらしむるに至つたと言はれてゐる。

アルカサールの前を崖端に沿ふて北に下れば「サンタ・クルスの病院」と稱するものがあり、十六世紀の交アンリクエド・エガスの設計に依つて建てられたと言はれてゐる。其の階段の欄干はサラセン式の極めて莊麗なもの、内庭の四周に二層の柱廊がありこれまた一見を値するものである。



千欄の院病スルク・タンサ

病院の前を西に向つて石階を攀ぢ方にサコドエルの廣場に至らうとする右手の陋巷に文豪セルヴァンテスの舊宅と傳ふるものがある。二階造の粗末な家、今現に貧民の數家族を收容する内庭の四周に極めて古風な柱廊を周らし、廊を支ふる柱はイオニヤ式の大斗を有する。

廣場の附近には土産物賣る家があり、店頭に「サラセン」模様の裝飾ある「ナイフ」を鬻いでゐる。嘗ては此の地方のサラセンに服したることもあれば、今にサラセンの裝飾をも傳ふるならんと思はれた。無類の鈍物なるが如きも記念の爲にと其の一を購ひ、匆々に此こを去つて停車場に至り、夕景六時の列車に乗つて再びマドリードの宿舍に歸つた。

六四、アルハムブラの舊王城

昭和三年三月五日汽車に乗じてマドリードを出で、一路南下、グラナダに至つた。往昔サラセン帝國のコルドバ王朝が此の方面を支配してゐた折には、イスパニヤのダマスクとは言はれ、氣は澄み、樹は茂り、金銀は充ち足つて、實に殷富の衢であつたと傳へてゐるが、成程今日でもイスパニヤでは珍しい位、樹木の鬱然として四周を繞るのを見る。

此の地に着した翌朝に有名なアルハムブラの舊城を見た。先づ宿りを定めた市の南端ヴィク

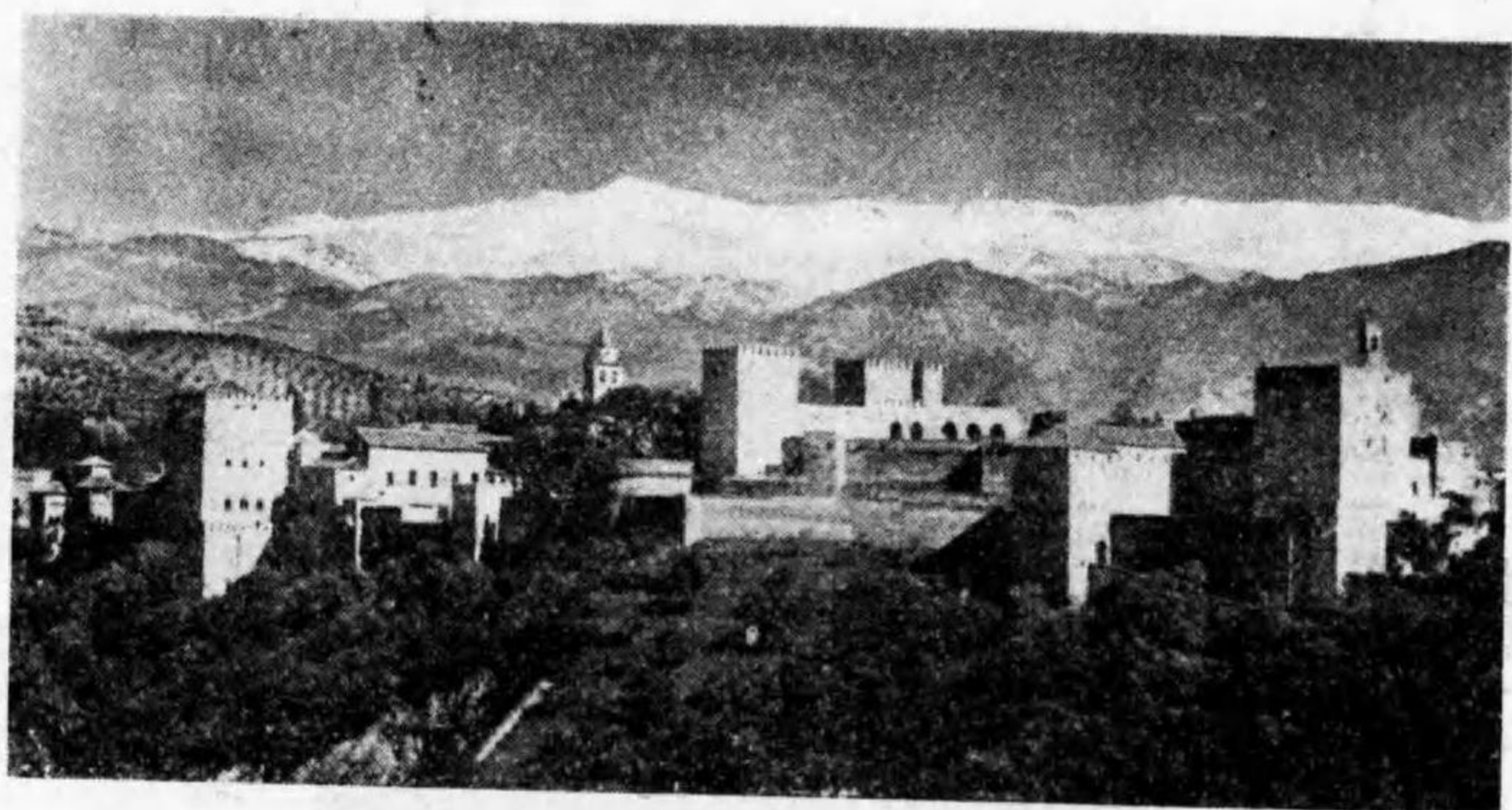
トリヤ・ホテルを出で、北に向ひてポリヴァール廣場に出で、そこから右に折れてアルハンブラの大手とも云ふべきグラナダの大門と云ふに至つた。煉瓦を積みて造り、凱旋門の形式を備へてゐる。

これから足指は漸く仰ぎ、鬱々たる樹林の間を行く。處々には小瀑の白練を懸くるをも見た。左に曲つて中門とも云ふべきユスチカの門を潜ぐり、所謂アルハンブラ王宮の入口に至つて券を購ひ、案内のものに連れられて、目新らしきアラベスクの模様ホルタ・デ・ラス・クラナダに飾られた各室室を見歩いた。

二三の小室を打過りて「カピラ・フイ・メキシア」と云ふ長方形の一室に入つた。メキシアとはアラビヤ語で會議室の意、十六世紀に改修を加へられ、イスパニヤ王の所屬時代には禮拜堂として用ひられ、今も尙ほ祭壇を供へた跡と云ふのが残つてゐる。その北側なる同じく長方形の小室をモサラと呼び、ムハメッド五世(グラナダ王)時代に建てられたサラモン式の禮拜堂であると言はれてゐる。アラビヤ式の漆喰細工の彫刻に依つて飾り立てられてゐる。

良がてパチオ・メクスアなる隣室に至れば室の中央に噴泉を造らへ、其の噴泉の裝飾の纖細な「サラセン模様」に飾られあるも面白い。

「パチオ・メクスア」の東側なる内庭に出づれば此處をパチオ・デ・アルベルカと云ひ、中に



歐洲史蹟觀

長方形の清冽の泉を湛へた池水がある。其の兩側には楊樹げの奇麗に剪り摘まれたのが列生し、鯉鮒の類が嬉々として池水に浮んでゐるのも面白い。此の園庭の四周は所謂アラビヤ式の柱廊に圍まれたれ園の南側に立つて北側を眺むれば銃眼を有する方塔は巍々として空高く聳え、塔下、廊上の瓦は、紅黃青緑を點綴して非常の美觀を極めてゐる。

此の園庭の北側即ち城の北端に當るところに「使臣迎サラ・デ・ニム接の間」と云ふのがある。殆ど方形の巨室であつて二層建、下層の床上、中央部のところに玉座の跡が残つてゐる。壁間青紅黃緑の漆喰細工に、サラセン式の紋様を散らしたる様、美觀である。此の間は外國使臣謁見の廣間として常に用ひられ、一四九二年グラナダ城のイスパニヤ王に降つた際にも、最後の降服條件を定めたのは此こ

であつたと言はれてゐる。

良がて此の廣間から東北に向つて長廊下を打過ぎ城の北端、斷崖の上に突出た高樓「トルレ・デル・ペナンドル」と云ふ方形の一室に出る。四壁天井の彫刻は何れもサラセン模様の精巧の



トル・ペナル・デル・ペナル

ものである。北窓の眺めは殊に宜しく、シエラネヴァダの支脈なるシルラ・デル・モロの眺も目覺むる許りに美しい。それも其の筈此處は其の昔(カミ)グラナダの王后の化粧の間であつたとか言はれてゐる。今尙ほ眉目麗はしい上蔭の高欄にもたれし姿も思ひ浮べらるる許である。

これから南に降つて「ハチオ・デラ・レヤ」の廻廊に立ち廊上より前栽を見降ろせば北歐には見易からぬ青竹の叢生するのが、我が國の園庭を見るやうな趣がある。庭上には更に一箇の噴泉があり、清冽の珠を捧げつつある。

其の東に存する園庭を「パチオ・デ・ダラクサ」と云ひ、針葉樹に取り囲まれた噴泉の清水を混々と逆らすも面白い。

園の南側なる細長い一室は、「サラ・デ・ラス・ドス・ヘルマナス」一には兩姉妹の間と云ひ、室の隅には所謂アルハンブラの金甕と稱するものがある。もと黄金を盛つて戦時の用に供へたとか言はれてゐる。

其の更に南側なる長方形の柱廊に囲まれた中庭を「パチオ・デ・ロス・レオネス」(獅子の庭)と呼び、庭の中央には有名な十二の石獅に支へられた泉鉢がある。この彫刻こそ十四世紀にムハメツド五世の命にて造られたと言はれて居り、其の形姿の妙が遂に此の園庭に名づくるに獅子の名を以てするに至つたのである。柱廊の彫刻は何れも色彩の鮮かなサラセン式であり、寧ろ其の色彩の濃厚なのに鑑賞の興を殺がるるやうな心地がせらるる。南側の柱廊に添ふてアベンセルラーゲンの間と稱するものがある。

傳ふるところに依ればグラナダの貴族にアベンセルラーゲンといふ一家があり、其の首長のハメツトなる者がボアブジル王の王妃と戀に落ち、其れが爲めハメツド始めアベンセルラーゲン一家のものは悉く斬罪に處せられたが、其の所刑の場所は此の室房の中であつたと傳へられ

てゐる。陰暗の室内は何となく鬼氣を含むが様に思はれたも無理は無い。

城の外の面に出でて舊城の南に接するカール五世の王宮なるものを見たが、復活式の建築は今粗方傾頽に瀕し、其の昔の輪奐の美は毫も見るべき縁よすがが無い。

これから王城の東南なるアルタ・アルハンブラの壘壁や城門さては城の西南なるアルカサバ園庭などを巡覽し心行く許り、四望の眺矚を恣にして、グラナダの市街に還り、途すがら大伽藍カテドラルの中にフェルヂナンド王イサベラ女王の墳塋を弔し、正午少しく過ぐる頃、ヴィクトリヤ旅館に還つた。

その翌くる七日の拂曉グラナダを汽車で立ち出で、シエラ、ネヴァダの山麓を迂路しつ、一路西進、セヴィリヤの舊地に向つた。

歐洲史蹟觀終

昭和五年六月一日發行

定價金參圓四拾錢

著作
所有

歐洲史蹟觀

著者

時野谷常三郎

發行者

目黑

印刷者

根本

東京市京橋區南傳馬町二丁目
東京市牛込區市谷加賀町二丁目



株式會社英秀印刷

發行所

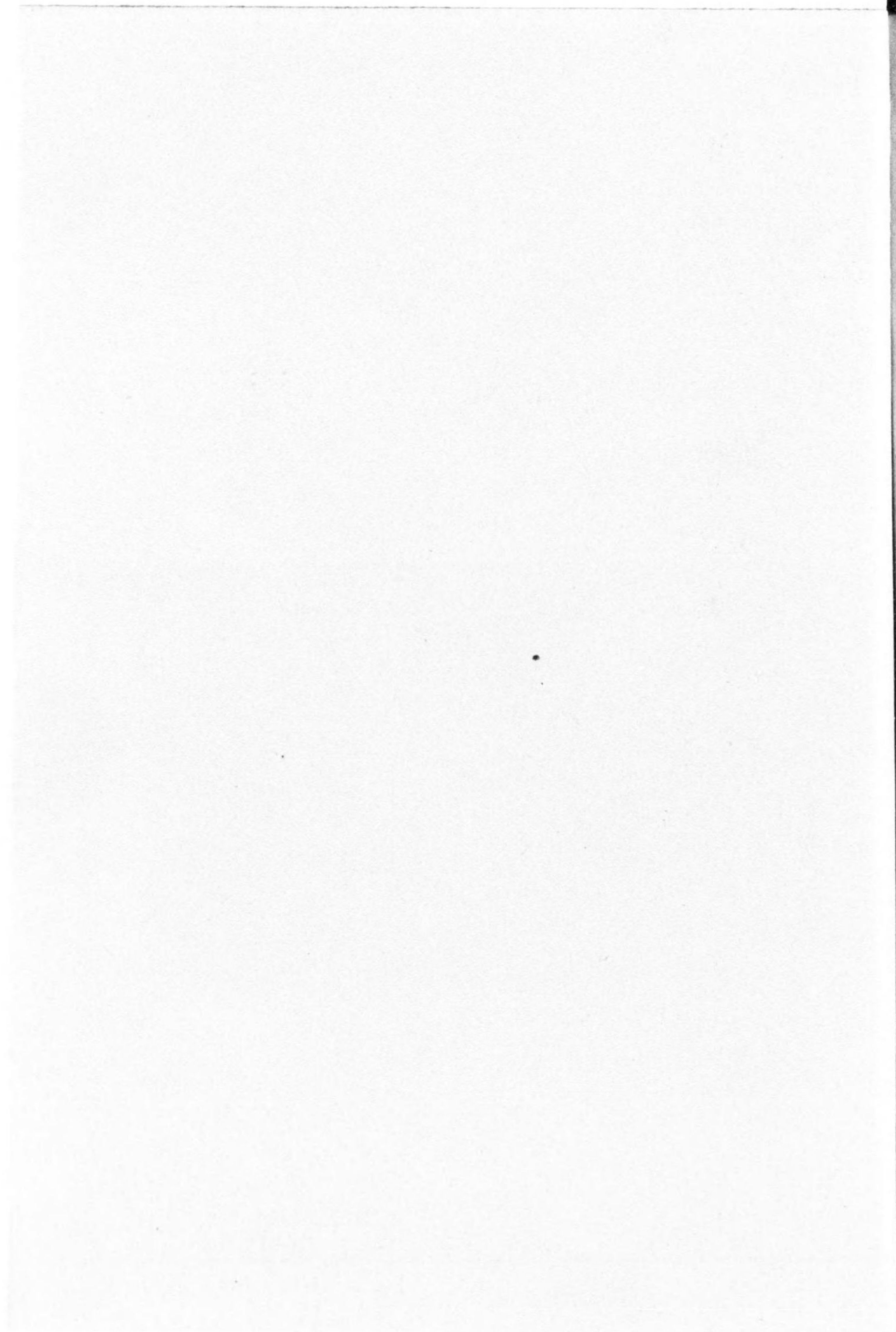
東京市京橋區南傳馬町二丁目
新島縣長岡市表町四丁目(本店)
新潟市古町通七番町(支店)

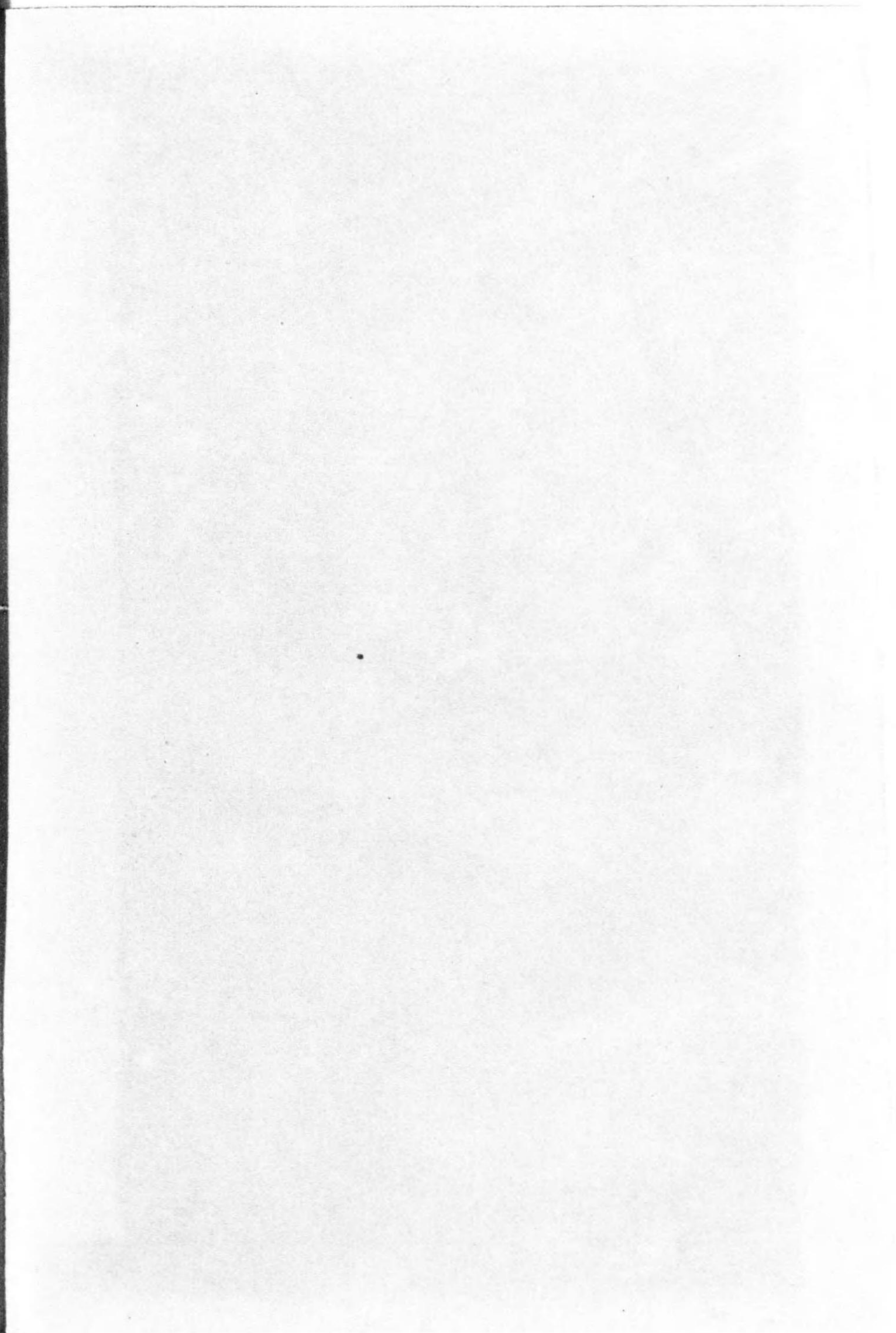
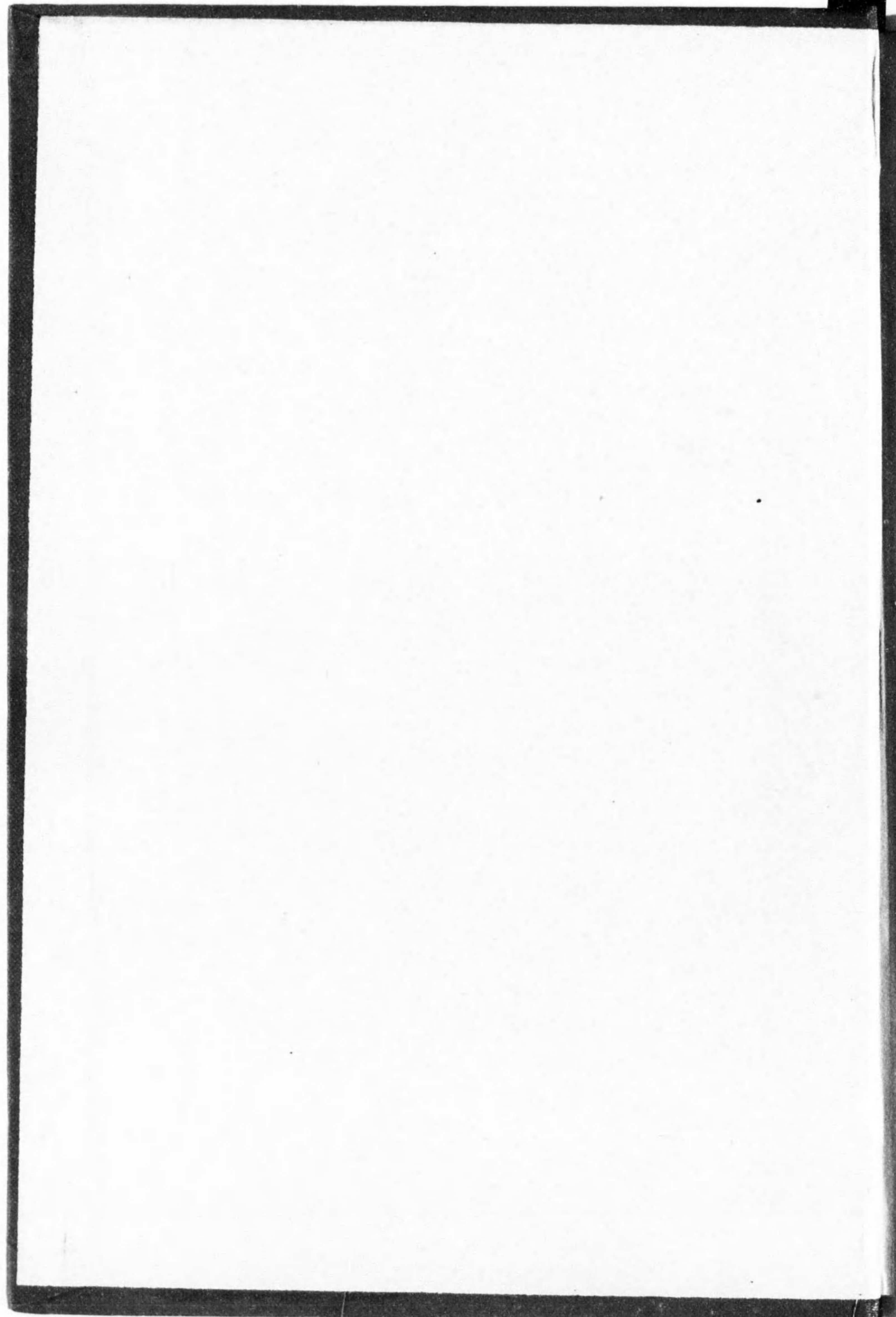
(東京) 電話京橋三四一七番
押替東京二八〇九番

目黑書店

(岡長) 電話長岡一八番
振替東京三六一九番

(湯新) 電話新潟九〇三番
振替長野四〇九〇番





終

